

平成 24 年度 SMMA 委託調査

ミュージアム被災状況と復旧プロセスに関する調査報告書

平成 25 年 3 月

仙台・宮城ミュージアムアライアンス (SMMA)

(受託者：仙台高等専門学校建築学科 坂口研究室)

【目次】

1. 調査研究の概要	p. 3
1-1) 背景	p. 4
1-2) 目的	p. 4
1-3) 調査概要	p. 5
1-4) 調査組織及び調査スケジュール	p. 5
2. 仙台・宮城ミュージアムアライアンス参加施設及び調査対象施設のヒアリング結果	p. 9
2-1) 仙台市八木山動物園	p. 10
2-2) 仙台市博物館	p. 13
2-3) 宮城県美術館	p. 21
2-4) 仙台市歴史民俗資料館	p. 26
2-5) せんだいメディアテーク	p. 30
2-6) 仙台市富沢遺跡保存館	p. 36
2-7) 仙台市縄文の森広場	p. 40
2-8) 仙台市天文台	p. 43
2-9) 仙台文学館	p. 46
2-10) 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館	p. 50
2-11) 仙台市科学館	p. 54
2-12) 東北大学学術総合博物館（資料のみ）	p. 58
2-13) 福島美術館	p. 63
2-14) 石ノ森萬画館	p. 67
2-15) 石巻文化センター	p. 70
2-16) リアス・アーク美術館	p. 72
2-17) 福島県立美術館	p. 75
巻末資料 ヒアリング調査用紙	p. 81

1. 調査研究の概要

1. 調査研究の概要

1-1) 背景

日本の公共文化施設は、1980年代以降の地方都市を中心とした施設整備の過程で、それまでの鑑賞型の施設から地域との関係を重視した施設へと、施設運営の在り方が問われてきている。他方、将来的な少子高齢化などの縮退状況を想定し、従来の鑑賞及び創造活動の支援を超えた、より多様な地域への関わりが必要とされつつある。特に地域の社会包摂の観点からは、公共文化施設や文化芸術活動の社会的役割が期待されている。例えば、ミュージアムが事業協力の枠を超えて、施設機能の連携や地域活動の支援を通し、社会的な課題に対応していこうとするなどの動きがそのひとつである。

仙台・宮城ミュージアムアライアンス（SMMA）は、地域の多様な博物館施設の活動を横断的にネットワーク化することで、地域の知的資源のより効果的な活用を図ることを目的に組織された。2009年には共同広報として行う催事の情報宣伝協力やポータルサイト構築、共同企画事業などを開始し、現在では各施設のそれぞれの特色を生かした共同企画の事業や、各館個別の紹介マップの作成、回遊ルートの開発など、市民によりわかりやすい形でのネットワークの可視化へと展開してきている。将来的には、ミュージアム施設を中心とした仙台市内の様々な文化資源の有効活用と新たなコンテンツ開発など、新たなネットワークの在り方を視野に入れた活動を目指している。

2011年3月11日に発生した東日本大震災は、東北地方の沿岸部を中心に、多くのミュージアムにも広域かつ甚大な被害をもたらした。加えて、施設復旧までの長期的な閉館などにより、地域の文化的なアクティビティにも大きな影響を及ぼしている。

このような状況を受け、仙台・宮城ミュージアムアライアンスでは、災害発生時及び復旧過程を詳細に記録し、そのプロセスにおける様々なネットワークの関わりを捉え、今後の災害への知見と地域におけるミュージアムの存在意義を捉えなおす必要があると考え、仙台高等専門学校建築学科 坂口研究室に本調査を委託することとした。

1-2) 目的

本調査は、東日本大震災における発災前後の施設スタッフの行動を中心としたミュージアムの状況を捉え、今後の災害対応への知見及び地域におけるミュージアムの在り方を問うことを目的とする。具体的には東日本大震災における仙台・宮城ミュージアムアライアンス参加館の施設(備品、資料含む)被害及びハード・ソフト両面の復旧のプロセスを把握するとともに、復旧プロセスにおける様々なネットワークの関わり、発災前後及び施設再開前後の施設スタッフの意識の変化、再開前後の利用状況の変化などを捉える。更に施設の再開意義及び復旧の過程に想定された事象等を捉えることで、具体的な災害対応の知見を捉えるものとする。

また、甚大な被害における復旧プロセスとその課題を明らかにするために、宮城県石巻市、気仙沼市、福島県内の公共文化施設の発災から再開及び現在までのプロセスを把握し、仙台市内の事例と共に整理し、地域におけるミュージアムの役割と意義を捉えるものとする。

1-3) 調査概要

調査は下記の 3 つの段階で実施した。

調査 1：東日本大震災における公共文化施設の被害状況調査

東北地方の公共文化施設の被害と再開状況を整理する。特に岩手・宮城・福島の 3 県に関して、公共ホールと美術館・博物館に分けて考察を行い本調査研究の事前調査とする。

調査期間 2012 年 4 月～2012 年 9 月

調査 2：仙台・宮城ミュージアムアライアンスの参加ミュージアムの資料概要調査

発災からの仙台市の動きと仙台市内の SMMA 参加館の再開状況を整理した。

調査期間 2012 年 6 月～11 月

調査 3：調査 2 を踏まえ、各参加館の発災から復旧までのプロセスと再開後の状況などを現地ヒアリング調査と関連文献により捉えるものとする。ヒアリングは、主に学芸員を中心とした施設スタッフの方へ行った。基本的なヒアリング項目は巻末に示す。仙台市外の対象施設となった石巻文化センター、石ノ森萬画館、リアス・アーク美術館、福島美術館、福島県立美術館は、各施設の被災状況や特性に応じてヒアリング項目を一部変更した。

調査期間 2012 年 10 月～2013 年 3 月

*なお本研究では、美術館・博物館全体をミュージアムとし、必要に応じて美術館や博物館に加え、劇場・ホールを含め文化施設と定義する。また、公共文化施設は私立ミュージアムと区別し用いることとする。

1-4) 調査組織及び調査スケジュール

調査組織

仙台・宮城ミュージアムアライアンス事務局

仙台高等専門学校建築学科 坂口研究室

担当 准教授 坂口大洋 専攻科生：西條美春 菅貴哉 本科生：白鳥大樹 芳賀祥子 松川その美

調査スケジュール（ヒアリング等実施日程）

■調査対象施設ヒアリング

仙台市博物館 2012/10/16

仙台文学館 2012/10/23

仙台市歴史民俗資料館 2012/10/24

東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館 2012/10/30

仙台市縄文の森広場 2012/10/31

仙台市富沢遺跡保存館 2012/11/07

せんだいメディアテーク 2012/11/14

宮城県美術館 2012/11/27

仙台市八木山動物園 2012/12/10

仙台市天文台 2012/12/11

仙台市科学館 2012/12/12

*東北大学総合学術博物館からは資料提供を受けた。

・仙台.宮城ミュージアムアライアンス参加館以外のヒアリング

石巻文化センター/石ノ森萬画館 2013/02/07

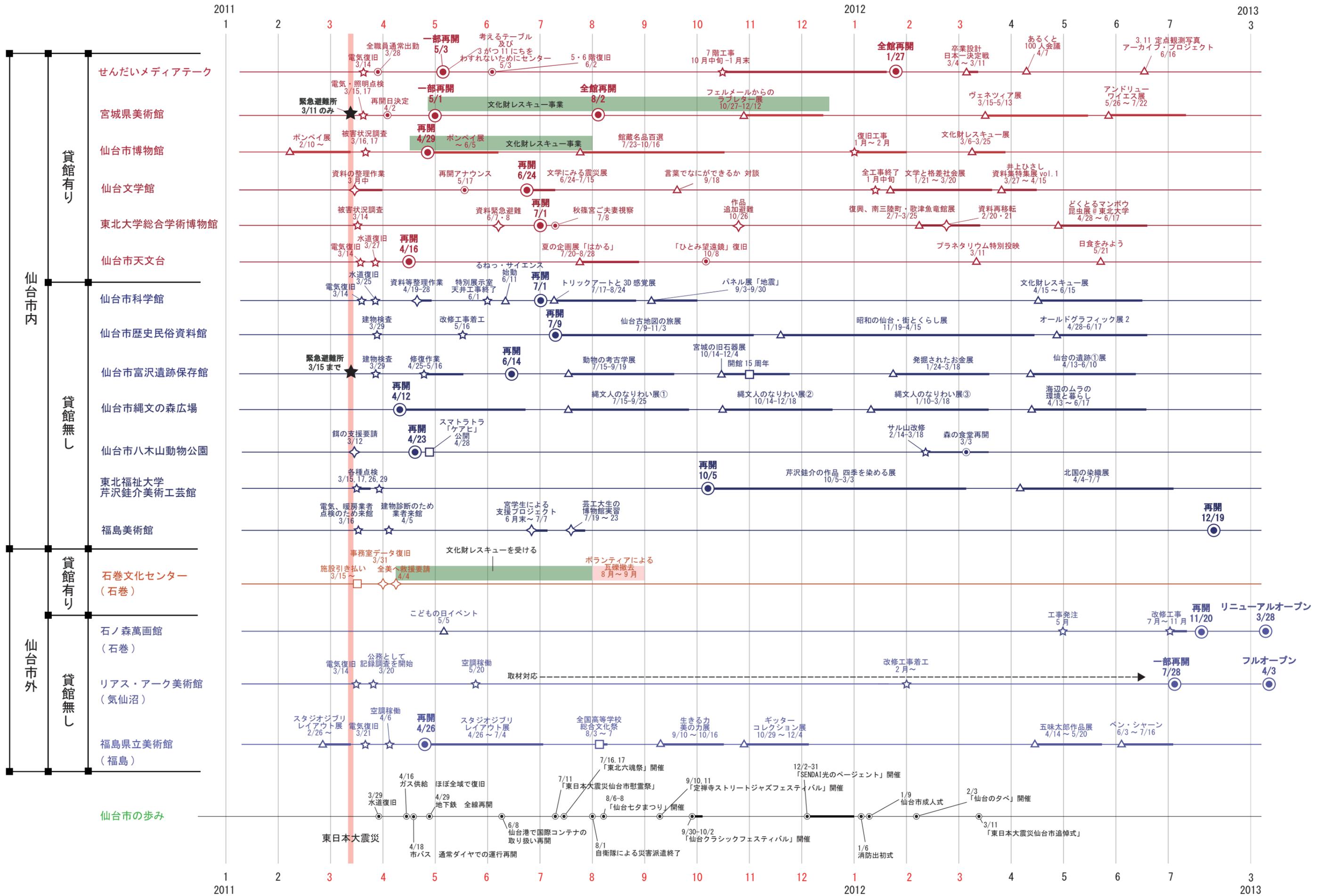
リアス・アーク美術館 2013/02/11

福島美術館 2013/03/06

福島県立美術館 2013/03/26

ミュージアムの復旧プロセスについて

● 再開 ☆ 復旧に際して(ハード) ◆ 復旧に際して(ソフト) ▲ 主催企画など □ その他



2. 仙台・宮城ミュージアムアライアンス参加施設及び調査対象施設のヒアリング結果

2-1) 仙台市八木山動物公園

ヒアリング日時：2012年12月10日(月) 13:30~15:00

担当：釜谷大輔氏



- ・開館年：1936（昭和11）年
- ・住所：仙台市太白区八木山本町1-43
- ・延床面積：管理施設：7,476.26m²、飼育施設：6,728.85m²
 ビジターセンター：1,883.63m²、売店・食堂・休憩所：423.42m²
- ・構造：ビジターセンター：木造2階建
 売店・食堂・休憩所：鉄筋コンクリート造, 鉄骨造, 木造
- ・年間来場者数：平成23年度461,771人

被害状況

■建物の被害

- ・駐車場法面崩落／段差発生
- ・ビジターセンター自動扉ガラス破損
- ・売店の壁レンガ崩落
- ・サイ、カバ舎のボイラー煙突亀裂
- ・サル山亀裂
- ・猛獣舎の木組み崩落
- ・猛禽舎の壁崩落

■人的な被害

特になし

1. 地震発生当日2011年3月11日（以下、3.11）

1) 地震発生当日の避難の状況

利用者：約30名（仙台駅まで送迎） 職員：30名程度

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

- ・施設内を30分～1時間程度巡回し、基本的な被害状況と動物の状況などを確認した
- ・職員5名を宿直とし、24時間体制をとった
- ・ライフラインの停止（断水、停電、ガス、暖房ストップ）
- ・暖房は重油で対応
- ・石油ストーブは館内の備品にて対応

■発災直後に影響を受けた動物

震災で直接的に被害を受けた動物はいなかったが、震災直後は温度管理が難しかったため寒さで死亡したり、餌の変化や余震のストレスで体調を崩した動物もいた。

- ・チンパンジー：代替えの餌を食べず、低血糖症による一時昏睡状態に陥る

- ・カバ：冬は屋内プールを温水で維持していたが、震災後やむを得ず中水（再利用水）で管理→一時起立及び歩行困難となる
- ・アオメキバタン：暖房が故障し、数日後死亡

2. 震災直後 3 月 12 日～3 月末日までの期間

1) 復旧支援などでの協力者の来訪

- ・給水：8 t 積載の給水車を手配し、茂庭浄水場から 3 往復して水を運搬また地下鉄工事の施工会社からも支援あり
- ・餌の支援要請 発注していた餌類が物流の遮断で納入目途が立たず
(在庫：水禽用ペレット約 7 日分・草食獣用ペレット約 10 日分・草食獣用乾草約 12 日分など)
- ・三陸沿岸部が壊滅的被害を受けたため、魚類の入手が不可能になった

- 3 月 12 日 上野動物園経由で日本動物園水族館協会による餌の支援を要請した
- 3 月 18 日 第一陣 乾草・ペレット類
- 3 月 26 日 第二陣 ペレット類・冷凍魚・猛禽用など
- 3 月 29 日 第三陣 ペレット類・ヘイキューブなど
- 4 月 4 日 第四陣 ペレット類など

震災直後、農産物の被害や物流の遮断のため、動物たちが食べる野菜や果物、固形飼料などが不足する事態に陥った。このような中、日本動物園水族館協会からの加盟動物園・水族館への呼び掛けにより、全国の 22 の動物園・水族館からエサの支援があり、当面必要なエサを確保することができた。このほか、山形県河北町や多くの個人からも支援があった。

3. 再開までの期間

■仮復旧工事

- ・4 月 13 日～4 月 15 日 サル山の仮復旧工事（ニホンザル）
震災で亀裂のはいた岩山を崩し、ヒューム管や単管パイプをつないだものを設置した。
復旧工事をして約 3 日間、ニホンザルたちは別の建物で 3～4 頭ずつに分けて飼育
- ・4 月 15 日～ サル山にサル戻る

1) 施設再開までのスケジュール 決定の経緯、判断基準

ライフラインが復旧したことで開園の気運が高まった。また、4 月中旬に市長から再開可能な施設特に動物園とサッカー場は早く再開するようにとの指示があったことで、再開を急いだ経緯がある。

2) 施設再開までのプロセスにおいて、復旧支援などの各種団体またはボランティアなどの訪問

日本動物園水族館協会による餌の支援（第一陣～第四陣）。

4. 施設再開後について

1) 利用状況は？

4 月 23 日に開園し（休園 42 日間）、23・24 日の来園者数は約 16,000 人

2) 管理・運営方法で、震災前と変更した点

■特別処置

- ・再開日の4月23日(土)と翌日24日(日)の2日間は、入園料を無料とした
- ・平成22年3月13日から平成23年3月11日までの間に発行された年間パスポートは、有効期限を1カ月延長した

5. その他

1) 管理・運営方法について、今回の震災の経験を反映させようと検討している課題など

発災当日は来館者が少なかったが、施設の特性として子どもが多い日、来館者が多い時間帯などの場合の避難方法、誘導の仕方などは検討すべきである。ライフラインが停止した場合の代替案、日本動物園水族館協会等との情報交換、マスコミへの情報提供などを想定し、検討しておく必要がある。

設備などの定期点検を年2回行っているが、自家発電や受水槽など災害時に機能すべき設備の点検を重点的に行うことが求められる。

■停電時のセキュリティーについて

基本的に生態展示をしている当園では、電気柵による動物の獣舎外への逃走を防いでいる。そのため停電時には、機能しないため、安全を考え屋内獣舎のみでの飼育になる。また、通水できないため各獣舎での水が使用できない。そのためこのライフラインの回復が遅いと、個体差はあるが生物の生存に直接影響を与える。

2-2) 仙台市博物館

ヒアリング日時：2012年10月16日(火) 13:00～15:00

施設管理担当：三條清彦氏 事業企画担当：菅野正道氏

- ・開館年：1986（昭和61）年3月（新館）
- ・住所：仙台市青葉区川内二十六番地
- ・面積：敷地面積：19,758 m²、建築面積：5,283 m²
延床面積：10,800 m²
- ・設計：佐藤総合計画
- ・施工：日新商事
- ・構造：鉄骨鉄筋コンクリート造
- ・規模：地下1階、地上2階
- ・年間来場者数：平成23年度 127,790人



被害状況

■建物

資料参照

■人的被害

なし

■文化資料

大きな被害なし

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日（以下、3.11）

来館者：150名（特別展「ポンペイ展～世界遺産 古代ローマ文明の奇跡～」開催のため平常よりやや多かった）

職員数：職員30名（但し、当日は半数勤務）

アルバイト4～5名

アシスタント10名

警備員3～4名

機械室3～4名

清掃4名

ポンペイ展事務局員15～20名 合計約50名

1) 地震発生当日の避難の状況

地震発生直後に避難放送を行い、緊急避難先として館正面入口前の広場を震災本部として設置し誘導した

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

地震発生とともに避難→来館者はそのまま帰宅→残った職員で点検後、閉鎖

■当日の詳細

- | | |
|----------|--|
| 16:30 | 全スタッフが館入口前に待機（委託業者、アルバイト含め）
館内の私物を取る場合は2、3 人一組で館内に入ることとした
嘱託、委託、アルバイトスタッフは帰宅 |
| 17:00 | 展示室、収蔵庫等を含む被害状況の確認（30 分程度）、デジタルカメラ画像・メモ書きなどの被害資料集約 |
| 17:30 | 博物館職員帰宅、係長以上の職員は待機、館内保安確保（シャッターを手動で降ろす等） |
| 19:00～ | 残留職員も順次帰宅 |
| 20:00 過ぎ | スタッフ完全帰宅（委託業者で帰れなかった人は、職員が車で送った。） |

2. 震災直後 3 月 12 日～3 月末日までの期間

■経緯

- | | |
|----------|---|
| 3 月 12 日 | 臨時休館 同時にポンペイ展展示物や常設展展示物の確認点検
(備考: ポンペイ展の展示物はイタリアからの借り入れ) |
| 3 月 16 日 | 博物館を建てた佐藤工業による被害調査 |
| 3 月 17 日 | 応急危険調査（建設会社による。一階部分は利用可という判断） |
| 3 月 22 日 | 被害仮設調査及び応急処置（天井落下物などの状況調査） |

■ポンペイ展・日常設展の展示物の損壊調査と直後の対応

- ・当初は博物館スタッフによる目視。ポンペイ展については、その後画像を送り東京の企画招聘元が判断、対応を指示。交通状況が改善するとともに東京から数人のメンバーが来仙し確認
- ・収蔵品などについて余震による二次的な損壊への対策
- ・落ちそうなものや倒れそうなものは安全位置への移動や紐による固定を行った
- ・ライフラインが復旧しない状況下で、懐中電灯などで対応

1) 地震発生当日に普段の用途と変えて使用した部分

基本的には休館とし、用途変更はなし

2) 職員の業務

- ・被害状況と収蔵品・展示資料の確認
- ・避難所への応援勤務（10 日間）
- ・職員及び施設関係者（資料所蔵者、研究者、元職員など約 100 人）の安否確認
- ・資料寄託者（約 100 名）へ資料の無事の報告
- ・資料調査などの際の協力者等約 300 名に資料保存を要請する文書を送付
- ・ポンペイ展の企画招聘元や仙台展実行委員会との諸連絡

3) 施設内（建築、設備、備品、資料など）の正確な被害状況の把握

3月11日～3月13日 施設内部～外構～収蔵品（おおよそは1～2日で把握）＊職員を中心に2人1組で行動

4) 復旧支援などでの協力者の来訪

- ・マスコミ（新聞社など）
- ・資料寄託者等のお見舞い等の訪問
- ・文化財レスキューのスタッフ

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

2011年

- | | |
|------------|---|
| 4月4日 | ポンペイ展展示資料の安全確保のため一時展覧会休止 |
| 4月7日以前 | 常設展はほぼ無傷のため、常設展から再開の見込み（5月のゴールデンウィーク頃）
ポンペイ展はイタリア側との協議が長引く予想 |
| 4月7日 | 大きな余震により、常設展の特注ガラスが破損。常設展再開の見込みが無くなり、残っていた常設展資料を収蔵庫へ。そのためポンペイ展を優先的に再開の交渉→4/19にイタリアの許可が下りる |
| 4月8日 | 天井等の復旧工事開始 |
| 4月21日 | 復旧工事（一回目）完了（＊付録資料に記載） |
| 4月26日か27日 | 市長自ら現地確認し再開許可を判断 |
| 4月29日 | ポンペイ展再開 |
| 6月5日 | ポンペイ展終了 |
| 6月8日～7月22日 | 震災対応の工事（2回目）（展示物のガラスケース修理） |
| 7月下旬 | 常設展再開（上記を鑑みながら決定） |

2012年

- | | |
|-------------|----------------------------|
| 1月16日～2月27日 | 一時休館してエントランスの入口の天井の改修（3回目） |
| 3月8日 | 紅白梅図展（多くの集客） |

2) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中でスタッフが主体となって関わった業務

- ・職員（学芸員）：展示資料を収蔵庫へ収納（普段は運送業者に委託するが非常時のため）。収蔵庫の整理、展示資料の固定（紐などで）
- ・仙台市史の編さんの業務が一時停止（印刷業者の営業停止のため）。
- ・企画内容の修正変更。ポンペイ展後のボストン美術館の展覧会はキャンセル。理由は主催者側の許可が下りなかったことと23年度の震災以降の予算の執行停止（業務としては、実行委員会やマスコミ等との連絡）
- ・職員の館外での応援業務として避難所の運営支援を23年度の6月頃まで何回か行う。3月中旬より10日間から2週間、朝・昼・晩3交代。一回に2～3名が勤務。その後も断続的に避難所の応援を行う
- ・瓦礫処理の立会いへの職員派遣（これも上記同様の期間、断続的に続く）
- ・資料レスキュー事業に着手

3) 施設再開までのプロセスにおいて、復旧支援などで、各種団体またはボランティアなどの訪問

- ・文化庁などが中心となって実施した文化財レスキュー事業の宮城県現地本部として館内施設を提供
→全国の博物館、文化財関連施設の職員、研究者等の活動拠点に
- ・ボランティアの受け入れは行わなかった
- ・市民からの当館への寄付の申し出が複数あった(仙台市に寄付はいただいた)
- ・施設使用者のキャンセル対応は特になし(元々貸し出しが少ない)

4) 施設閉鎖中に、震災前に利用していた市民や活動団体と連絡を取る機会がありましたか？

寄贈者、寄託者等に連絡、安否確認と資料無事の知らせ

5) 再開までの復旧過程で、参考とした資料及び事例等

- ・初めての経験ばかりであり、特に参考とした事例はなし

4. 施設再開後

1) 来場者に対する災害対応における留意・確認点

- ・避難行動の判断基準作り
震度3で注意、震度4以上で避難(避難訓練を定期的に、具体的に想定して実施)
- ・基準作りについて
震災以前に震災避難マニュアルは存在(大きな地震などの際は避難するという大雑把なもの)。震度3で安全確認、震度4で避難か待機、避難の場合は放送で知らせるなど、経験を踏まえ現実的なものに修正した

2) 施設貸出しに際する留意・確認点

- ・市内のホールは被害が大きかったが、当館の貸出対象のホールについては被害が小さく、常設展と同じ時期に貸出開始(ホールのみ)
- ・ギャラリーも使える状態だったので資料レスキューの本部として使用。23年度は貸し出さなかった。ホールについても貸し出しは少なかった(学校教育の普及活動における学校の説明などでの使用)
- *地震発生などの情報の周知は徹底するようになった

3) 管理・運営方法で震災前と変更した点

- ・震災以前から宮城県沖地震発生の可能性が99%という情報があったので、収蔵品の固定の仕方や、展示の仕方は対策していた
- ・あまり被害がなかったことに関しては、上記の要因に加え、建物自体の耐震性能も高く、立地地盤も比較的強固だったため。(体感的にも揺れは発表震度よりも弱く感じた)

5. その他

1) 管理・運営方法について、今回の震災の経験を反映させようと検討している課題など

基本的に対応は変わっていないが、危機対応マニュアルの精度は上がった。

(B) 事業企画担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日(以下、3.11)地震発生直後

(A) -1.の項目を参照

2. 再開までの期間

1) 再開当日、利用者や来場者の様子から特に感じたこと

市民(活動団体含む)から、寄せられたメッセージは断続的にあり:アンケートなどで「施設が開いて安心した」という感想をもらったなどと再開を喜ぶ声が多かった。

2) 市民の利用状況で変化した点

来館者の服装を見ると、施設再開直後～ゴールデンウィークまでの来館者数が少ない時期は比較的ラフな格好の来場者が多かったが、来館者数が増えてきた5月下旬頃から、日常的なフォーマルな余所行きの服装に変化してきた。ポンペイ展終了頃には震災以前の平均来館者数を超える来場者数となった

3. 施設再開後

1) 震災前に企画していた事業等の中で、震災を受けて会期等企画を変更したもの

ポンペイ展の展示の中で当初予定していた、ポンペイの人々が火山灰に生き埋めになった被害の様子を紹介した作品は展示しない方向に変更した

2) 新たに震災関連の企画を立案・実施したもの

東北の震災の歴史を展示することで今回の震災を考えるためになるのではないかと考え、過去の津波などの歴史を伝えるパネルを展示。4月29日より初めはパネル5枚でスタートし、段階的に充実させ、最終的には20枚作成した。(当館の無料ゾーンに展示)

- ・その後も震災時だからこそ文化財の重要性を感じてもらうために、上記のパネルに加え、文化財レスキューの様子の展示を、展示室内、ギャラリー、廊下などを使い継続して展示
- ・また、パネルを多く作って、学校や市民センター、区役所、市役所に貸出も並行して行った(観覧者から、パネルの撮影の希望や、パネル内容を資料として貰いたいとの希望が多く、パネル原稿の白黒コピーの冊子を希望者に3000部ほど配布)
- ・来年度2013年の新しい来館者が見込めるイベントを見据え、改めて上記パネルを館内に展示する。また館外での展示も行いたい。年内一箇所を目標に開催場所を検討中であり、パンフレットのような冊子も検討している

3) 震災後新たに関係(ネットワーク(国内外問わず))を有した団体

■文化財レスキュー事業

- ・文化庁(以前から博物館業務のなかで関係有り)、国立の文化財研究所、市内外の博物館の職員や研究者などが参加
- ・国立の博物館、国立の文化財研究所
- ・県内外、市内外の博物館(特に宮城県内の被災したミュージアム(例、石巻文化センター、気仙沼市立リアスアーク美術館などの施設など)
- ・文化財レスキューの宮城の拠点として当館が7月末まで機能し、その間、国立の博物館や文化財研究所のスタッフが常駐。5月下旬～6月は一日平均20人、7月は十数人が事業に参加(*実際に作業をしに来る人に加え、視察も多数)
- ・当館は後方支援(基本的には館内の作業を中心に活動)に徹し、技術者や東北大学の研究者との橋渡しをした
- ・基本的には県の文化財保護課が事業の中心的役割を果たした
- ・個人所蔵資料や福島県内におけるレスキュー活動の案件で宮城歴史資料保全ネットワーク(NPO)へのつなぎ役を果た

した部分がある

- ・23年度後半以降は、文化庁の補助金などを活用した

■文化財レスキューを経験して

宮城県は比較的順調に事業が推移（福島、岩手に比べると）。教育委員会が早期に事業を発足させ、国や県内外の関係機関との連携を推したことが要因といえる

一言で、既存の学芸や関連機関の連携組織はあまり機能しないことが多かった。どちらかといえば県の担当者と各施設の職員、学芸員などの横のつながりが強く、それが軸となって活動が展開された

- ・当館が事業の現地本部となったのは、文化財レスキュー側からのアプローチ（立地が良いことと、以前から関係機関との人的関係があったこと、被害が比較的小さかったことなどが要因と推定）である

■市内の文化財保有者の巡回調査

- ・4月下旬～8月末に約280軒を訪問した。民間の持っている細かい資料については文化財レスキューではフォローできないと判断し、当館職員3～7人が3人1組で週3日のペースで市内の旧家や寺社などを巡回訪問し、資料の有無と被災の有無を調査。応急処置が必要な場合は館側で引き取り、処置を行った
- ・訪問判断基準は経験と記憶。現代は旧家などでも古文書などの保持の有無を認識していない所が多い（*昭和20～30年代はどこの家が長く歴史があるなど、祖先の記憶を受け継いでいたが、今は希薄になっている）
- ・そもそも存在を知らない、又は資料の存在を知っていても自らの生活の復旧で精一杯であったり、遠慮の気持ちで要請しないなどがあり、訪問を行うことで、新しく資料が出てきたり、探しておくなどの行動を促したり、実は待っていたなどの反応があった（*必要な部分があれば文化財レスキューと連携した）

■公文書等の保全活動

- ・国立公文書館の取り組みの中で、被災公文書の修復、支援事業（国の3次補正による）が行われた
- ・当館では、中野・荒浜・東六郷の3つの小学校と荒浜の消防署の被災公文書については、7月～9月頃に被災状況を把握していた。その中で一部の処置できるものについて、乾燥やドライクリーニング等を行っていたが、分量が多く処置しきれなかった。国立公文書館の修復事業で当館の休館期間に1ヵ月半ほど場所を提供し、事業を実施した。当館職員も協力し、費用は公文書館負担で3小学校と消防署の被災資料の洗浄・乾燥・再生の作業を行った

■応援業務

- ・9月以降の、市内の小規模ミュージアム施設の支援（被災書庫の整理など）も実施

4. その他

1) 地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じたこと

- ・仙台市博物館として市博は国宝や重要文化財を保有したり、展示したりする公開承認施設としての一面もあるが、一方で地域の博物館としての役割も意識する必要があると震災後感じている
- ・地域の資料の所在調査については震災の有無に関わらず実施してしかるべきことだったと感じている。資料レスキュー活動における所在調査の重要性は以前からも言われていたが、今回の震災で改めて再認識した
- ・資料を将来へ残していくためにも日常の業務として資料の調査活動は、継続的にやっていくべきことである（まだ訪問できていないところもあるし、再度訪問するとまた新しく資料が出てくることも多くある。何かあれば連絡下さいと呼びかけていても、遠慮か億劫で自主的に連絡が来ることは少ないので、巡回済みのところでも何度も訪ねることが必要）
- ・市全体で取り組んで（指定文化財、埋蔵文化財、汲々としている中ではあるが）、当館が中心になって、他の施設

と連携して行っていこうと思っている

- ・震災後、資料の預かりや、寄贈の申し出はあったが、例年より特別に増えたわけではない
- ・阪神・淡路大震災後に実施された時、文化財レスキュー事業では、一時的に預かり、最終的には所蔵者に戻すという方針ではあったが、戻せる状況に何年も要したり、そのまま関連機関への寄贈に移行した例も多かった
- ・当館で保全やレスキューしてきた資料についても、今後の見通しは不透明である

*文化財レスキュー事業は2年に延長（文化財レスキュー事業は当初は1年の予定）文化財レスキュー関連の委員会などは2012年度で終了する

■「宮城県被災文化財等保全連絡会議」とは

県内の連絡調整のためのグループ（幹事：東北歴史博物館 副幹事：当館）＋県の教育委員会、宮城県美術館、ミュージアム施設、市の教育委員会、文化財課、仙台市科学館、東北大学、リアス・アーク美術館など計25～26団体

- ・上記のグループが当分宮城県内では引き続き、預かった資料、文化財の処理を決めていく予定
- ・被害が大きかった石巻文化センターについては平成30年に再建する動きがあるが、この施設の資料は全国に分散しているため、その把握と保管上の問題（今保管している施設が持ちきれなくなる可能性や、資料の劣化の恐れなど）を対応しなければならない
- ・沿岸部の津波被害の地域では、現在でも時折資料が発掘されたりするのでその対応が求められる
- ・幹事会を2カ月に1回、全体会議を3～4ヶ月に1回のペースで開催
- ・今回の文化財レスキューでレスキューされた資料が3～4年後にどう使われているかが問題（今回レスキューされたものが結局どこかの収蔵庫に入れっぱなしになっては意味がない）。少なくとも、今回のレスキュー事業を契機に宮城県内では上記の問題が起きないようにすることと、地域への情報発信と連携関係の仕組みづくりに取り組むことが必要と考えられる
- ・まだ復旧していないミュージアムでも、震災から3～4周年の時には色々なところでレスキュー活動や震災関連の展示があるかもしれない。それをきっかけとなってミュージアム施設と地域とのつながりが深まることが期待される
- ・インフラ停止の時の空調の問題は震災の発生が3月だったので、そこまで問題はなかったが、夏ごろの計画節電（間欠運転）の時や、震災直後のチェックでは見逃されていた設備の被害が後になって出てきたことが問題だった
- ・被害の見えにくい被害がある可能性を見越して、長期的に被害検査をしていくことが大事
- ・躯体の被害だけでなく、設備機器の被害もしっかり、長期的に点検していく必要がある

■再開にあたって

・市民からのメッセージについて

当館常設のアンケートによりいくつか再開を喜ぶメッセージが寄せられている（改めて新しくアンケートは作成していない）。

・余震の起こる中、一旦再開の判断基準について

- ・4月7日以降比較的余震は収まってきたことと、本震でそこまで大きな被害がなかったため、安全を一旦確保したと判断した（ポンペイ展や常設展の開催なども視野に入れて判断した）
- ・神戸でも余震は1年続いた。完全に安全の判断は誰にもできないので、そこは折り合いをつけて、市民の文化的欲求に合わせて展示をしていく
- ・当館は1986年完成なので、今後10年、15年先を見て、改修などの展望も整理する必要があると考えている。特に機械設備は10～15年スパンで10年前くらいから考えている

- ・しかし近年の財政悪化、震災による復興への優先により、施設のランニングコストに影響が出ると考えている。また今は震災による緊急の補助金により行っているが、将来的な施設の老朽化・定期的な修復の考え方についてはなかなか進んでいない
- ・建物と文化財の時間的なスパンが合致しない（建物：数十年／文化財：数百年）ために、インフラ整備についてもランニングコストが分かっていないので、継続して機能するようにそれを平均化して伸ばしていくしかない

・ミュージアムの運営と地域社会との関係について

- ・被災地にあるミュージアムは地域の文化財を扱うことと共に、人々の文化的欲求を満たし、心の安定を得るための「癒しの場」としての在り方が求められるようになった。展覧会やイベントの意義が変化している
- ・文化財資料を保持している旧家や寺社などについて、仙台市内だけで恐らく 1000 軒くらいをフォローする必要があるが、外に対して特にアピールをしないコレクターに関してはフォローしにくい
- ・今回の巡回訪問では旧仙台北下、市街地は対象とできなかった。最近の都市化に伴い、以前の旧家などが駐車場やビルになっていたりして（土地を保有したまま貸地化している状態だと推測されるが）、どこに移ったか分かり兼ねる状況があったからである。また都市部では既に住んでない人や、居留守を使われることが多いなどの理由もある（街中以外でも何度訪れても留守の家が何件かあった）
- ・平成の市町村合併などによって、文化財審議委員や文化財保護委員の数が減り、且つその多くが大学等の研究者となっている。これによって合併前に見られた学校の教員や郷土史家のような地域の事情に通じた人物が委員を務めることは少なくなり、地域の記憶の知識（何処の家が古いとか、結婚関係があったなどの詳細な記憶）が失われていった
 秋保町、宮城町：仙台市との合併と共に記憶の継承が難しくなった。
 七郷・六郷・岩切・長町：昭和初期の合併による記憶の断絶
- ・今回の旧家の巡回調査は断片的なこれまでの情報の蓄積によって、370 件のリストをつくり巡回したが、仙台市内には、このような旧家の情報や地域の事情に通じている人材はごく限られており、危機的状況である
- ・コミュニティの変質（解体）により、農村部でも歴史的記憶は薄れていっている。地域に固有の文化や歴史的な記憶や資料をいかに将来へつなげ、且つ市民と共にその情報を活用していくかという問題が、文化財行政やミュージアムの活動の新たな課題として、浮かび上がったように感じられる

2-3) 宮城県美術館

ヒアリング日時：2012年11月27日(月) 14:00~16:00

担当：三上満良氏

- ・開館年：1981（昭和56）年11月3日
- ・住所：宮城県仙台市青葉区川内元支倉34-1
- ・面積：敷地面積：34,531.81m²、建築面積：5,915 m²、
延床面積：12,130 m²
- ・設計：前川國男建築設計事務所（本館）
大宇根建築設計事務所（佐藤忠良記念館）
- ・施工：間組
- ・構造：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造
- ・規模：地上2階・地下1階
- ・年間来場者数：約25万人



被害状況

■被害概要

建築的な被害は比較的軽微な内容であった。屋外広場、テラス部のタイルの割れ・ズレや段差の発生等で、屋内は、展示ケースのガラス破損以外に大きな損傷はなかった。宮城県美術館は設計段階に宮城県沖地震（1978年）が発生したため、構造設計を見直し耐震強度を向上させた経緯がある。また美術館自体が強固な地盤に立地していたことも被害が小さかった要因の一つである。

収蔵品については、収蔵棚にナイロンバンドを付けるなどの地震対策がされており、被害はなかった。他方、特別展（アートみやぎ）へ展示中だった5作品（立体）が破損するなどの被害が確認された。

■建築及び設備の被害

展示室 1・3	固定展示ケースのガラス破損（総幅20m）
教育普及部東側のテラス	沈下
屋外階段タイル	剥離
エントランス等	照明カバー落下（1箇所）
展示室内の天井ルーバー	ズレ
ルーバー留め具	落下
本館エントランス記念館玄関外天井 GRC 板	ズレ
展示室出入口防火扉	ガイドレールから脱線（1箇所）、錠前破損
記念館1階ロビー排煙口	破損
展示室県民ギャラリー可動壁	ズレ
建物周辺タイル	欠損、ひび割れ、段差、盛り上がり等の発生
内壁	ひび割れ（各所）
外壁	歪み

■人的な被害

なし

■作品への被害

特別展「アートみやぎ 2011」クレイワーク作品（粘土の素焼き作品）	落下・大破
特別展「アートみやぎ 2011」映像作品用プロジェクター	落下・損傷

■備品関係の被害

創作室：マップケース	転倒破損
展示室：温湿度計	落下破損（1台）
展示室：スポットライト	落下破損（1台）
倉庫：スチール棚	倒壊
事務室：テレビ	落下破損（1台）

1. 地震発生当日 2011年3月11日（以下、3.11）

1) 地震発生時の避難の状況

来館者：約30～40名 スタッフ数：約40名程度 合計80名程度

2) 当日の状況

揺れが収まってから5分以内に中庭に避難した。停電になっていたが自家発電は機能していた。状況を判断し閉館することになった。周辺の橋の安全を確認し、来館者へ伝達し帰宅を促した。宮城県の災害時対応マニュアルにより、当日から職員は警備対応のために24時間の宿直体制をとった。近隣の住民や、学生等で自宅に戻れない人への対応のため、1日だけ緊急の避難所として施設を提供した。

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

1) 職員の業務

- ・作品の保全作業。3月20日くらい（10日ほど）まで
- ・余震が頻発したため、作品の保全と固定作業、清掃等を美術館の職員だけで対応
- ・停電と余震のため階下の収蔵庫まで移すエレベーターが使えず、各展示室内の安全な場所を選んで作品を固定
- ・予定していた企画展などの事業の対応を、本庁所管課と調整しながら検討
- ・県の営繕課及び建築の設計事務所と施工会社の担当者が被害状況を確認し、点検、修繕箇所を検討
- ・外部への支援は基本的に要請しなかった。全国美術館会議等から支援の打診はあったが、自分たちで対応した
- ・4月7日の余震でガラスケースが破損

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

- ・公共施設であり、専門家の点検による安全確認を再開の前提とした
- ・当時の館内には、開館できる状況であればできるだけ早期に開館するようという雰囲気があった
- ・目立った被害がなかった佐藤忠良記念館、創作室は5月1日に開館。再開を決めたのは4月上旬～中旬
- ・本館は、エントランスの天井部に被害があり、足場を仮設しての安全点検を終えた7月5日から全面再開した
- ・当面の展示、利用者の動線に関係しない部分の修繕工事、点検作業は年末、年度末まで持ちこした

2) 職員の業務

- ・4月の中旬の時点で収蔵庫に作品を全て収納
- ・各方面への被害状況の調査と報告、修繕計画の作成
- ・中止した事業の事務処理、再開後の事業の計画と準備
- ・文化財レスキュー活動への参加

3) その他の所見

- ・レストランとコーヒーショップ委託業者の撤退が決まり、新規業者の公募が必要となった
- ・ガラスケースの破損により、飛散防止用のガラスへ変更するための調整に手間取った
- ・空調については、当初の建築断熱性が高いので、数日間空調が止まったが大きな影響はなかった
- ・部分再開時の動線計画やゾーニングは難しいところがあった

■文化財レスキューとの関わり

- ・文化財レスキューは石巻文化センターを対象としたので、宮城県美術館も拠点として機能した
- ・美術部門を担当し、応急処置と一時保管場所を提供した（地域内の機関が、歴史、考古、民俗、自然など各々の専門分野を分担）
- ・1週間くらいの単位で全国の美術館から学芸員が集まり対応。
- ・津波の海水や汚泥で被災した作品のレスキューは非常に難しかった

4) 事業企画面の課題

- ・原発の問題もあり、海外から日本への作品の貸し出しが難しくなった
- ・海外の美術館や職員によっても温度差がある。逆にこういう時期だから作品の貸し出しで支援したいという申し出もあった。展覧会だけではなく、作品移動のルールも厳しいものがあった
- ・作品の寄贈者など、協力者への情報提供を積極的に行った

5) 作品の展示方法について

- ・予想される宮城県沖地震の対応を以前から行っていたので大きな変更は少なかったが、可動壁は確実に固定するようになった。ワイヤーのフックなどは以前からロックがついたものを使用する等の対応を行っていた
- ・免震台は彫刻などの展示に非常に有効であった。横揺れだった点が多い。彫刻も以前からボルト固定し、台座にはウエイトを入れて重心を下げていた
- ・収蔵庫の収蔵の仕方も以前から柱に縛り付けていたように、或る程度は対応できていた
- ・天井のルーバーも安全対策を実施していたので、落下には至らなかった

4. 施設再開後

1) 貸し出しスペースに対して

県民ギャラリーなどについての安全管理をそれほど変更した部分はないが、設定法や避難誘導への心構えが変わった

2) 利用状況は？

再開後來場者の数は多い。被災地への対応として、海外の館もサポートしてくれるような支援があったので、結果として来場者が増えている。再開の日は開館前に開場を待っている人がいた。確実に必要とされていることを実感した。

作品を実際に見に来て、状況を確認したり地震の質問をする人が多かった。創作室の利用者などは再開に関して気にかけてもらったと思う。地震直後から問い合わせが多かった。

5. その他

美術作品の保全に、梱包材料が大量に必要であったが、以前から備蓄していたので対応できた

1) 震災に関する企画の立案は？

今すぐというわけではないのだが、将来的には考えていかななくてはならない。外部からいろいろなリクエストもあるが少し時間が必要だ。

2) 震災前後で学芸員の意識として変わったことは？

風景観が大きく変わった

3) 阪神・淡路大震災以降に文化財レスキューが立ち上がったが、今回の東日本大震災において新たに考えられることは？

まずは津波対策。それから今回の場合、原発事故のリスク対応で作品を施設から避難させる必要が出た場合、全ての作品を移動できない時に、どの作品を残しどれを移動させるか、どこに動かすかという非常に難しい判断に迫られたであろう（美術品のトリアージは可能か）。今後も、館同士の連携、個人（学芸員）の連携が必要だと思われる。

4) 全国美術館会議の災害マニュアルは？

現段階は館毎に策定しているのが現状。ただ阪神・淡路大震災の際は、どのようなことが起きたかを詳細な記録を作成し、そこから各館の担当者が学ぶという姿勢。高知県立美術館の水害などの例も今回の文化財レスキューに役立っている。津波対策として、施設移転は難しいが、収蔵庫等の設備のグレードを上げることで作品の保存を図ることができると思う。

5) 修復のあり方

災害によってもたらされた被害の跡は残すべきであるという考え方もある。傷を残すことは物語でもある。作品の来歴が大事である。

6) 作者が現存する場合は修復のあり方は？

作家に判断を委ねて新しい作品に改変してしまうのか、その作品のオリジナリティーを第一と考えるのか、まずは所蔵者の考え方である。美術館は、オリジナルの状態を可能な限り残して鑑賞可能な状態に戻し、直したところがわかるように修復するというルールに則って対応してきた

7) その他

- ・文化財レスキューできていた学芸員の何人かは、災害派遣で来県したスタッフもいた。警察や消防の派遣と同様の扱いになっていたスタッフも居て、美術館などの文化施設の復旧支援が以前よりも公的な意味を持つようになったのかもしれないと感じた
- ・文化財は希少価値の高い（市場価値のある）ものなので、展示室や収蔵庫のセキュリティーと同様に、修復作業場所や仮保管場所の情報管理も必要だった

2-4) 仙台市歴史民俗資料館

ヒアリング日時：2012年10月24日(水) 13:00～15:00

施設管理担当及び事業企画担当：土岐山武氏

事業企画担当：畑井洋樹氏



- ・開館年：1979（昭和54）年11月3日
（平成12年度に建物の補強・改修工事を 経て平成13年度にリニューアルオープン）
- ・住所：仙台市宮城野区五輪一丁目3-7（榴岡公園内）
- ・面積：敷地面積 671.34m²（公園敷地 10.2ha）、建築面積 584.47m²、延床面積 1,271.37m²
- ・構造：木造、安山岩組構造
- ・規模：地上2階
- ・年間来場者数：平成23年度 23,019人、平成22年度 26,521人、平成21年度 26,972人

被害状況

■建物の被害

漆喰塗りの壁（館内外）約200か所以上の亀裂
風除室（エントランス）ガラス一部破損

■人的な被害

なし

■資料等の被害

堤人形など約20点の被害

■備品等の被害

ガラス製の移動展示ケース倒壊破損

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日（以下、3.11）

来場者：1名（高齢の女性）

スタッフ数：職員8名（全職員9名のうち、1人休み）、仙台市文化財課のアルバイト1名、計9名

- ・震災後数日にわたり、スタッフが館外・館内に分かれ、目視により被害状況を確認した
- ・収藏品、展示品の確認・整理（安全な場所へ移動させる）→収藏品の修理は行わず、廃棄もしなかった

1) 地震発生時の避難の状況

- ・階段にいた来館者1名を外へ避難させる（1分も要せず）。その後他に館内の来館者の有無を確認し、スタッフも外へ避難した。来館者は自主的に帰宅。職員で公園へ避難してきた方にお湯と敷物の提供
- ・職員の帰宅方法の確認
- ・17:00に職員帰宅
- ・館内外で漆喰が多数剥落し、階段手すりが破断落下
- ・施設が榴岡公園の中に位置しているため、公園利用者避難への対応のためにブルーシートを敷くなどし、一時的な仮設の避難スペースとし、避難者の対応をした

2) 避難時において、困った点

揺れがいつくるかわからず、建物のさらなる損壊も想定されたので建物内の状況把握ができなかった。

2 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

1) 職員の業務

- ・職員の安否確認
- ・施設内（建築、設備、備品、資料など）の正確な被害状況の把握

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

3月29日	建物診断（壁の剥離などがあり危険の為、「修理するまでは休館」の診断）
4月12日	建築業者が来館
5月16日	改修工事着工
6月18日	引き渡し
7月9日	再開
3月12日～7月8日	休館

- ・壁面の漆喰が特殊なものであるため、入手に時間がかかった
- ・工事工程表をもとに7月9日に再開することを決定した

2) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中でスタッフ が主体となって関わった業務

- ・宮城野区高砂の向田文化財整理収蔵室（歴史民俗資料館と同規模）と泉区根白石（公民館を再利用）にある収蔵庫の確認、整理
- ・歴史民俗資料館としてボランティアへ行くことはなかった

3) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

市民文化事業団の新規採用職員3名が研修を兼ねて1週間程度、根白石の収蔵庫の整理などの支援にあたった。

4) 施設閉鎖中の震災前に利用していた市民や活動団体との連絡

特になが、来館者が掲示を見て閉鎖していることを確認する姿は見られた。

4. 施設再開後

1) 来場者に対する災害対応における留意・確認点

- ・震災時のスタッフの役割分担を重点的に見直した
- ・避難誘導の際の意識が変わった

2) 管理・運営方法で震災前と変更した点

震災前から本棚を固定する等の対策は行っていたが、棚の上部だけを固定していたため、震災時は棚の下部が動き、本が落ちたので、その部分を固定したり補強したりするようにした

3) 利用状況で変化した点

小学校の団体来館が急増した。来館者の55%は小学生で、2011年度は計102校の小学校が来館した。

5. その他

1) 地域との関係において震災前後で変わった(変えざるをえない)点は?

被災者からの資料の問い合わせや寄贈が増えた。

2) 地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じる点は?

このような施設の存在意義や必要性を再認識する機会となった。

(B) 事業企画担当

1. 2011年3月11日(以下、3.11)地震発生直後

1) 施設閉鎖中における震災前に利用していた市民や活動団体とのコンタクト

- ・建物の被害を心配されて様子を見に来た一般の方もあった。
- ・資料寄贈や調査研究などで連絡のある方や例年実施しているイベントの協力者などには被害状況や復旧の見込みなどに関する連絡を不定期ながらとっていた。

2. 施設再開後

1) 新たに震災関連の企画を立案・実施したものは?

震災以前の沿岸部の暮らしについて常設展に追加する計画を立てている。

2) 復旧の過程で、震災前から関係のあった団体等からの支援は?

- ・仙台市博物館や仙台市史編さん室、宮城歴史資料保全ネットワーク(NPO法人)などと協力し、被災地の文化財等の現状確認を行い、必要に応じて歴史資料の保全活動(資料のレスキュー)を行った
- ・京都大学人文科学研究所近代古都研究班〔代表高木博志氏〕から寄付の申し出があった

3. その他

1) 企画立案・運営方法について今回の震災の経験を反映させようと検討している課題は?

震災そのものを対象とする企画展は難しいが、震災前のくらしの様子などを常設展で紹介できるようにしている。

2) 3.11を体験した文化施設関係者として、未来に向けて残すべきものは?

以前から昔のくらしにみられた知恵と工夫について紹介する施設だが、震災で電気やガス、水道などを自由に使えない経験をしたことで、かつてのくらしにあった知恵と工夫をより意識するようになった。それなりに豊かなくらしを支えた過去のくらしの知恵と工夫を将来に伝えていきたい。

3) 地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じる点は?

- ・歴史と現在とのつながりをより広く知らせる必要があるという点。たとえば地震や津波への備えを説いた言い伝えによって守られた命もあるが、震災以前に実感をもって理解していた人は少なかったのかもしれない。歴史から学ぶことを伝えていくことが必要。
- ・震災後の片づけなどの中で、それと気づかずに古文書や古写真などを処分してしまったという話を聞くこともあった。それぞれの家に残されている物の中には、地域の歴史を物語るうえで重要な資料となるものもあるかもしれない。たとえ古くて汚れが目立つものであったとしても大切な情報があるかもしれないということを折にふれて広く知らせておく必要をより強く感じる。

■調査について

- ・被災地に行った方や被災家屋の取り壊し現場からの情報を元に調査に行くことも多く、イベントでお世話になった方を頼りに現地調査に行ったこともあった
- ・被災地の調査で新しく歴史民俗資料館の資料として寄贈していただいたものもある。被災家屋の解体現場で資料の寄

贈をお願いすることもあった。寄贈品は歴史民俗資料館の資料として保存している

- ・震災以前に地域にどのような資料が残っていたかなどの情報は、震災直後には十分に把握できず、市民センターのように地域と密接な関係のある施設との前々からの連携の必要性が意識された
- ・被災地での調査は、以前から資料の保全活動に積極的に取り組んでいた宮城歴史保全ネットワークとの連携もあり、今回は比較的、迅速に調査を行うことができた

■ その他の所感（今回の震災を受けて）

歴史民俗資料館は明治7年建築の旧陸軍兵舎で仙台市の有形文化財に登録されているが、開館直前の昭和53年に宮城県沖地震があり、その時の被害も修繕され、耐震補強の工事が施されていたために今回の震災での被害は最小限に抑えられたのではないかと。

2-5) せんだいメディアテーク

ヒアリング日時：2012年11月14日(火)13:00～15:00
施設管理担当：橋本直樹氏 事業企画担当：清水有氏
副館長：佐藤泰氏

- ・住所：仙台市青葉区春日町2-1
- ・開館年：2001(平成13)年1月
- ・面積：敷地面積：39,48.72㎡、
建築面積：2,933.12㎡、
延床面積：21,682.15㎡
- ・設計：伊東豊雄建築設計事務所
- ・施工：熊谷組・竹中工務店・安藤建設・橋本JV
- ・構造：鉄骨造、一部鉄筋コンクリート造
- ・規模：地上7階、地下2階
- ・年間来場者数：約100万人



被害状況

■建物の被害

- | | |
|---------|---------|
| 3階図書館 | ガラス破損 |
| 7階 天井落下 | |
| 1階南側大開口 | ロックピン破損 |

■人的な被害

なし

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日(以下、3.11)

来館者：200～300名(推測)

職員数：メディアテーク職員15～20名、図書館20名

その他の職員：舞台機構操作員、清掃、設備、警備、アルバイトなど25名 計約70名

1) 地震発生時の避難の状況

- ・来館者、職員などメディアテーク裏(敷地外)の駐車場に避難
- ・図書館利用者などの施設利用者以外は発生後すぐに館外へ避難し帰宅

■当日の施設利用状況

通常の金曜日は5～6階ギャラリーを使用した展示会で混みあうのだが、3月11日は前の週から引き続き開催されている展示会だったため、それほど混んでいなかった。

- | | |
|------------|-------------------|
| 1階オープンスクエア | 利用なし |
| 2階会議室 | 利用有り |
| 5～6階 | 利用有り(せんだいデザインリーグ) |

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

- ・はじめに屋外の駐車場に全員避難したが、雪が降り始めたので、敷地内バックヤードに移動。職員がラジオを起動（空港の津波被害の情報を得る）
- ・ヘルメットを着用し、各階の状況確認や安全確認と貴重品の搬出をおこなう
- ・最低必要人数でグループを組んで西側の避難道路を使い、来館者の荷物を取りに行く。財布やコートを置いてきた人が多かったため何度か往復した（又は改めて来館をお願いした）※16:00頃終了
- ・その後主要職員を残し施設閉鎖作業を開始した。他の職員は解散、帰宅
- ・南側大開口のロックピン破損を確認
- ・正面玄関の電子錠が停電により施錠不可となっていることを確認
- ・南側歩道へガラスが散乱していたこともあり、立ち入り禁止のバリケード設置及び注意の張り紙設置
- ・メディアテーク内の4隅の4本の柱と梁に破損がないかを点検
- ・19:00頃当日休日シフトだったスタッフが合流
- ・シャッターが自動で上がらなくなっていたため、手で上げる作業を行う
- ・20:00頃全館を閉鎖し、解散

※非常照明が点灯し、最低限の照明は確保できていた

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

1) 地震発生当日に普段の用途と変えて使用した部分

バックヤードを一時退避場所に使用。

2) 職員の業務

- ・3月12日8時30分に全職員出勤とした
- ・1階の搬入口に集合、情報交換。全職員の安否確認
- ・出勤当番を決め、その他の職員は帰宅し以後自宅待機とした
- ・3月14日～15日までは待機するだけの期間が続いた（守衛室の下で待機）
- ・職員2名、公用車にガソリンを確保するため市内のガソリンスタンドへ
- ・交通手段獲得のため放置自転車を使えるようにした（2～3台）
- ・ライフライン対応。1箇所だけ水の出る水道が外にあったのでそこを利用。電気は3月14日に復旧
- ・3月15日オープンスクエアを事務スペースとして確保し、1階と2階を優先的に片付け作業開始
- ・3月17日図書館オフィス内作業開始（躯体の安全確保後）
- ・3月18日メディアテーク職員による避難所への応援勤務開始（高砂市民センターへ朝～夜、2名ずつ、約10日間）
- ・3月28日全職員通常出勤
- ・3月29日に他館からの応援18人を含め、図書館の片付け作業を2/3程度行う
- ・3月30日業務に必要な機材を7階から2階へ移動開始（4月7日にほぼ完了）
- ・施設利用予約者への連絡およびキャンセル対応

■当時の作業の詳細など

- ・最低2名1組で作業。安全確認が取れておらず、環境も悪かったためなるべく短い時間で作業
- ・2階が業務の中心となるため十分な環境確保に時間がかかった。PC用ケーブル類の床下配線、電話線の配線の作業に時間を割く
- ・1階オープンスクエアにオフィスを設置。必要最低限のPC、外部との対応業務（連絡・打ち合わせ）

- ・4月7日の地震後、図書館の片付けに他の市民文化事業団職員が応援に駆けつける
- ・「卒業設計日本一展」に関わる学生スタッフが30人程度（のべ100人）で模型の片付けを行う（3日要した）

3) 施設内（建築、設備、備品、資料など）の正確な被害状況の把握

- ・3月13日～ 館内の状況調査
- ・3月14日 電気保安協会と通電確認→漏電などで火災が起きないように事前にチェック
- ・3月15日 職員用エレベーター運転再開

4) 復旧支援などでの協力者の来訪

- ・施工業者（以前担当だった人が個人的に）訪問。その後業務として訪問
- ・3月12日、13日は熊谷組（現担当者）

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

■3階市民図書館、5月再開の決定の経緯

- 4月2日 設計者伊東豊雄氏が市長と面会（東北大・小野田泰明教授同席）連休前再開を確認
- 4月9日 移動図書館を再開（臨時駐輪場で）
- 4月26日 記者発表（市民図書館とメディアテークの一部開館について）
 - ※5月3日までに1～3階の機能を復旧させることが第一目標となる。「エスカレーターの不具合の補修」と「消火水槽（地下）の補修」が具体的な課題であった。また崩落したガラスの復旧工事も行われたが、当初は強化プラスチックで代用した

■5～6階ギャラリー、6月3日再開の経緯

5～6階ギャラリーは5月3日の時点で復旧できていたが、直ちに貸し出し対応はできなかったため、6月3日に再開することとした（市民図書館は上記経緯で5月に再開決定がなされたが、ギャラリーの再開は当初から6月と予定されていた）

■6月3日再開後の経緯

6月3日に再開したが、当初利用状況はまばらだった（出展者側の都合による）。利用状況が元に戻ったのは8月以降だったように思う（2階の会議室もほぼ同様）。

2012年1月の全面開館は7階の復旧工事日程に合わせて決定した（工事は10月半ばより開始）。

2) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中で職員が主体となって関わった業務

10月半ばからの7階復旧工事期間中は、6階ギャラリーの貸し出しを中止、使用不可能になった7階オフィスの備品を6階に移動させ、仮置きした。

3) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

- ・3月11日同様、4月7日の地震後の設備などのチェックは県外（京都や長野など）からの業者が行ったとの報告もある
- ・4月8日に仙台市民文化事業団職員が市民図書館の応援作業に来館（17時まで）

4) 施設閉鎖中の震災前に利用していた市民や活動団体との連絡

- ・4月17日以降電話がつながり始め、館使用取り消しなどの連絡をとる
- ・還付請求を受付

4. 施設再開後

1) 施設貸出しに際する留意・確認点

- ・施設の貸し出しについての打ち合わせの際に、地震想定の問題が増えた（1月再開後）
- ・避難経路の安全確認とその後の落ち着いた避難誘導を指導している
- ・落下の危険性のある照明（イベント用）からの退避を指導している

2) 管理・運営方法で震災前と変更した点

- ・部分再開期間は開館時間を変更した。

5月3日～5月31日	10:00～18:00
6月1日～	10:00～20:00
- ・節電のため、エレベーターの運用を常時4台から、3台に変更

3) 利用状況で変化した点

- ・全体的な利用状況は一時期減少したが、現在では戻りつつある
- ・夜型の活動利用が少なくなった印象がある

5. その他

1) 管理・運営方法について、今回の震災の経験を反映させようと検討している課題など

- ・維持管理業務や点検業務などに大きな変化は無いが、防災訓練などは見直した。3.11発災時は地震の揺れによる誤作動で火災報知器が鳴動したため、地震のみを想定していたマニュアルが機能しなかった。
※地震の場合は揺れが収まるまで屋内で待機、火災の場合はすぐに屋外に退避、と全く対応が異なる。
- ・帰宅困難者についての課題が解決されていない

(B) 事業企画担当

1. 2011年3月11日（以下、3.11）地震発生直後

1) 3.11 から再開までの期間、職員の業務

- ・事業担当職員も復旧作業の補助をおこなう
- ・避難所等への支援活動に参加
- ・県立美術館や事業に係る関係者及び事業団関係者などと個別にコンタクトし、情報を共有
- ・国内外の美術関係者からの支援などへの対応
 - ※1 それぞれ支援の連絡があったが、どのような支援を受けるべきか判断し兼ねた
 - ※2 メディアテークへの寄付の話が多くあったが、館単独では受け取れないため当初保留していた
- ・国内外メディアへの対応
- ・再開時の事業にまつわる関係者への連絡

2. その他

1) 企画立案・運営方法について今回の震災の経験を反映しようと検討している課題

- ・生涯学習施設であるメディアテークだからこそできることに重点を置き、震災後に顕在化した「隔たり」（被災地／非被災地、被災者／非被災者それらが層のようにになっている状況）に「行き来する回路」となり事業を展開。これにより、被災の状況、心情などにアクセス可能、個々の学習機会となるように取り組んだ
- ・それらの事業にはこれまでにない市民の積極的な参加が見られた
- ・しかしながら、その積極性が日常の回復と共に目減りしつつあることから、その維持に重点を置く事業を今後も継続させていく

2) 3.11 を体験した文化施設関係者として、未来に向けて 残すべきもの

■将来的な展望

- ・震災後に取り組んだ市民による復興過程の記録アーカイブがある。（事業「3がつ11にちをわすれないためにセンター」）今後は、これらの資料を活用した事業に取り組んでいく
- ・また、これらの資料はまとめて将来設置が予想される「メモリアルセンター（仮称）」的施設に権利移転できるようにしてある。これにより、よりスパンの長い伝承へと用いることができる
- ・震災によって課題が明確化し、施設を活かしつつ「公共」に寄与する事業により具体的に踏み込むことができたように思われる。これらの経験を今後の事業に反映させていきたい

3) 地域との関係において震災前後で変わった（変えざるをえない）点は？

■てつがくカフェについて

例えば「てつがくカフェ」という事業は震災前だと抽象的なテーマを扱っていたこともあり、どうしても参加者は少なかった。震災後、言葉にならない言葉を持ち寄る参加者が、それぞれの経験を語り合う場として、自然に参加するようになり能動的な参加者が増えた様に思える。これも各個人が当事者意識を持って、公共の場に臨んでいる現れのように思われる。市民（特に地域住民）とメディアテークは、こういった「てつがくカフェ」のような集まりの中で、地域文化が生まれていくようなことを積極的に持ちたいと考えている。そしてこの「場」の箱の中で、色々な事業展開が行われるような構造をも作っていければと感じている。

※メディアテークで開催されている事業の大多数は施設を一定の料金で貸し出す「貸し館事業」であるが事業の品質の担保はされにくい。貸し館であるからという理由での文化施設の一方的な場の作られ方がある場

合、もしかしたら「てつがくカフェ」の様な場は s m t の事業を行う上での批評の場（市民フォーラム）としての機能が担えることになるかもしれない。

4) 地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じる点は？

■ミュージアムの役割の変化

- ・ドイツのミュージアムの民主主義的な運営（展覧会の内容等を全員で決める）の事を講師に来ていただいて学んだがその時はあまり理解できずにいた。しかし、てつがくカフェなどの事業が頻繁に行われるようになり、より（ドイツの事例が）身近に感じるようになったといえる
- ・特に「コールアンドレスポンス」という事業はアートやミュージアムに関心の高い一般市民が学習を通して展覧会を作り上げる事業が機能し始めたように感じる

一般的な観点から言うと百年近く作り出されてきた美術館・博物館というシステムがメディアの進化に伴い時代遅れになり壊れかかっていた状況に加えて、大震災が追い打ちをかけ大きく揺らいだが、そのことで、ある意味これまでのコードからは自由になり、ゼロからの再生を地域とともに連動して行おうという意識も強く芽生えてきている。つまり文化財を守るだけでなく、地域とともに現在の「文化連携」も再生していかないと美術館・博物館が成り立たないという意識が生まれたと思う。（佐藤泰副館長）

■学芸員の意識の変化

震災時は様々な部署の職員と一緒に復興のための仕事を行い、一体となって何でも作業しなければ成らなかった為、個別の専門的な職の意識よりも、全体を見ながら個別の仕事を行うという意識が芽生えたように思える。

また学芸員という仕事は狭き専門領域を掘り下げる仕事でもあり、ともすれば美術館・博物館という権威に乗っていれば存在は保たれてきたが、震災によってそれは揺らぎ、どんな仕事をどう行っていけば良いかという自覚が出てきたように感じる。（佐藤泰副館長）

2-6) 仙台市富沢遺跡保存館

ヒアリング日時：2012年11月7日(水) 13:00～15:00

施設管理担当：太田昭夫氏 事業企画担当：佐藤祐輔氏

- ・開館年：1996(平成8)年11月
- ・住所：仙台市太白区長町南4-3-1
- ・面積：敷地面積：14,263 m²、延床面積：2,743 m²
- ・設計：坂倉建築研究所
- ・施工：鴻池組
- ・構造：鉄筋コンクリート造
- ・規模：地下2階、地上1階
- ・年間来場者数：平成23年度23,016人、平成22年度34,546人、平成21年度36,306人



被害状況

■建物の被害

地下展示室の樹木の支持体の崩落
吊り天井の損傷
「氷河期の森」にある栈橋の損壊

■人的な被害

なし

(A) 施設管理担当

1. 地震発生日 2011年3月11日(以下、3.11)

1) 地震発生時の避難の状況

来館者：1名

職員：6名 受付：3名 清掃：3名 警備：2名 合計13名

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

地震直後に閉鎖

3) 避難時において、困った点

停電によって地下施設が見えなくなり、確認ができなかった。また地下隔離壁の水位や温湿度の管理ができなくなった。

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

1) 地震発生日に普段の用途と変えて使用した部分

3月15日まで避難所として利用された(指定避難所ではないので物資の配給などはなかった)

2) 職員の業務

- ・仙台市から仙台市市民文化事業団への要請で、少人数ではあるが長い期間館外での応援勤務が続いた
- ・応援勤務の内容は被災者向けの罹災証明発行業務や他避難所での応援業務

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

6月13日 仙台市から再開許可

6月14日 再開

2) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中でスタッフが主体となって関わった業務

企画展の日程変更による準備・調整

3) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

4月14日 専門家による被害調査

- ・休館中ではあったが、小学5年生100名ほどの見学を受け入れる
- ・ボランティアの募集(震災以前から)

5) 再開までの復旧過程で参考とした資料及び事例等

遺跡部分の樹木の保存処理などについて既存事例を参照した。

4. 施設再開後

1) 利用状況で変化した点

秋田・岩手・山形など周辺の県からの利用者が激減した(特に秋田はほぼゼロになった)。逆に被災地(宮古や福島など)からはよく来ている。

5. その他

1) 管理・運営方法について、今回の震災の経験を反映させようと検討している課題など

連絡が取れない状況での対応については、考えなくてはいけない点である。

2) 地域との関係において震災前後で変わった(変えざるをえない)点

避難所になりうる施設であることを認識してもらえたと思う。地域とより密接な施設でありたいと感じるようになった。

(B) 事業企画担当：

1. 2011年3月11日（以下、3.11）地震発生直後

1) 3.11 から再開までの期間、職員の業務

- ・全職員8人中の6人が勤務中であった
- ・施設、遺跡の被害確認を行いたかったが、展示室が地下のため、電気が止まっているうちはできなかった
→電気復旧後に被害確認
- ・応援業務の要請は基本的になかった

2) 再開に向けた準備以外に、復旧に際する業務

企画展の修整・変更業務。震災前に準備していた「春の企画展」がずれ込み、調整を行った。

3) 施設閉鎖中における震災前に利用していた市民や活動団体とのコンタクト

ボランティア団体や学校関係者からの連絡が多かった。

→縄文の森と連携しながら、閉館中も外で可能な利用学習(石器を作るなど)を行った

2. 再開までの期間

1) 再開当日、使用者や来場者の様子から特に感じたこと／市民（活動団体含む）から、寄せられたメッセージ

- ・来館者と直接触れ合う機会がないため正確には把握しにくい
- ・4月の早い時期から再開時期の問い合わせが来ていた
→問い合わせは非常に多かった。県内にとどまらず県外からも多かった（珍しい施設のため学校の校外学習や、ツアーのコースなどにも入っていることなどが要因として考えられる）

2) 市民の利用状況で変化した点

- ・県外の利用者が激減した。日本海側の学校の修学旅行などが減った。特に秋田の学校は殆どなくなった
- ・震災の被害というよりも原発問題が原因ではないかと考えている
- ・4～6月は修学旅行シーズンで、例年はその期間の利用者が多いが、当時ちょうど閉館期間に重なったため来館できなかった学校が多い。一度関係が切れるとなかなか戻ってこない。その一方で相馬市や福島市からわざわざ来てくれる学校もあった

3) 使用者に対する災害対応における留意・確認点

- ・市民文化事業団より避難経路の表示、余震注意などを表示するよう指示があった
- ・職員間では利用者に対する心配りが少し変わった（避難経路の確認や危険予知など）
- ・リアリティのあるマニュアルの作成の必要性を感じた
- ・節電対策でエコ電球への交換、エアコンの稼働を減らすなど、節電はできる限り実行している

3. 施設再開後

1) 震災前に企画していた事業等の中で、震災を受けて会期を変更したもの／企画に盛り込んだ震災の視点等

4～6月に予定していた企画を秋に変更し、秋の企画を冬に変更して実施した。もともと決まっていた企画なので、あえて震災を盛り込むことはしなかった。

2) 新たに震災関連の企画を立案・実施したもの

歴ネット加盟館の被害状況のパネル展を行った（調査時実施中だった）。

3) 復旧の過程で、震災前から関係のあった団体等からの支援

直接的支援は特になし。日本博物館協会、奈良文化財研究所などから問い合わせはあった。

4) 震災後新たに関係（ネットワーク（国内外問わず））を有した団体

4月後半に被害状況を専門家に見てもらった会を開いた。

4. その他

1) 企画立案・運営方法について今回の震災の経験を反映させようと検討している課題

地下展示を見越して、補強・見直しなどは行っている。

2) 3.11 を体験した文化施設関係者として、未来に向けて 残すべきもの

閉館中の問い合わせなどの多さから、文化施設を守っていくことの大切さを感じた。4月の早い段階で「今それどころではないのでは？」というタイミングでも問い合わせを受けたことなどから、人々の生活に文化施設が必要とされているということを感じた。この経験を後世に残すということも必要不可欠なこと。

3) 地域との関係において震災前後で変わった（変えざるをえない）点

地震直後、避難所ではないが地域の人々が集まってきた。当館がいざという時に集まる場所として市民に認識されていたことを初めて実感した。

4) 地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じる点

いつでもやっているということが大切である。より身近に感じてもらえる施設であるためにこれほど重要なことはない。

2-7) 仙台市縄文の森広場

ヒアリング日時：2012年10月31日(水) 13:00～15:00

施設管理担当及び事業企画担当：大友広美氏

- ・開館年：2006（平成18）年7月15日
- ・住所：仙台市太白区山田上ノ台町10-1
- ・面積：敷地面積：27,350.94m²、延床面積：1,211.79m²
- ・構造：鉄筋コンクリート造
- ・規模：地上1階（一部2階）
- ・年間来場者数：平成23年度23,016人、平成22年度34,546人、平成21年度36,306人



被害状況

■建物の被害

特になし

■人的な被害

特になし

■資料等の被害

特になし

■備品等の被害

展示ケースの扉の不具合、段差、ひび割れが発生

※固い岩盤の上に建物が建設されている点が幸いしたと思われる

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日（以下、3.11）

1) 地震発生時の避難の状況

来館者：0名

職員：4名（全6名中） 清掃業者3名 計7名

- ・地震発生直後、建物前の広場へ避難
- ・直後は近所の中学生も広場へ避難して来た
- ・揺れが収まってから中学生を帰宅させた

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

- ・余震が来る度に広場へ避難しながら、施設内、展示品の状況確認
- ・所長（震災当日は公休日だった）が到着し、報告、打ち合わせを行った
- ・17:00頃 解散

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

1) 職員の業務

- ・片付け
- ・展示物のずれ修正
- ・出勤できる職員のみ勤務し、仙台市からの指示を待ち、待機している状態であった
- ・他の施設への応援には行かなかった

2) 施設内（建築、設備、備品、資料など）の正確な被害状況の把握

- 3月15日 電気点検（業者が来館）
 - 3月17日 照明点検（業者が来館）
 - 3月26日 空調点検（業者が来館）
 - 3月29日 建物診断（業者が来館）
- ※資料の被害はなかった（多少ずれただけ）

4) 復旧支援などでの協力者の来訪

施設の登録ボランティア 50名が様子を見に順次来館した

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

- 4月8日 再開決定（市による決定）
 - 4月12日 再開
- ※改修工事は再開後順次行った

2) 改修工事以外の復旧に際する業務とその中でスタッフ が主体となって関わった業務

- ・震災前、予約をしていた一般団体からのキャンセルの対応
- ・仙台市の学校の施設利用授業の中止・キャンセルの対応
- ・片付け、整理

3) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

- ・学校からは再開後に見学をしたいとの連絡がきた（他の施設より被害が軽かったため）
- ・町内会、子供会、修学旅行担当の先生等から再開時期の問い合わせがあった
- ・震災前より利用者が増えた

4. 施設再開後

1) 来場者に対する災害対応における留意・確認点

- ・地震が起きたら広場へ避難するように促す掲示をした
- ・見学に来る学校の先生には打ち合わせ時に緊急時の動きの確認を行っている

2) 利用状況の変化

- ・利用者数：平成 22 年度 29,000 人平成 23 年度 31,000 人（県内、市内 の利用者が増えた）
- ・今年度は 22 年度と同じくらいの利用者数だが、県外や遠方からの利用者の割合が増えた
- ・沿岸部の子供たちが遊ぶ場所を求めて来館しているのではないか

5. その他

1) 管理・運営方法について、今回の震災の経験を反映させようと検討している課題など

- ・震災時、水道が出ていること等の情報発信ができなかった
- ・避難関係でも何か協力できれば良かった。館内は広くて暖房がついていて水道も通っていた

(B) 事業企画担当

1. 再開までの期間

1) 再開当日、利用者や来場者の様子から特に感じたこと／市民（活動団体含む）から、寄せられたメッセージ

- ・開館したことによって遊ぶ場所ができてよかった等のメッセージが子どもから寄せられた
- ・縄文遺跡と震災との関わりについて市民センター等から質問されることが多くなった

2. 施設再開後

1) 復旧の過程で、震災前から関係のあった団体等からの支援

奥松島の縄文広場の方とは再開支援の交流会を行ったりした。

3. その他

1) 地域との関係において震災前後で変わった（変えざるをえない）点

- ・ボランティアをしたい方が 2、3 名訪ねて来た
- ・市内の仮設住宅へ出張し勾玉作りを行っている（ボランティア会の企画）

2) 地域におけるミュージアムのネットワークの意義

- ・地底の森ミュージアム（兄弟館）、仙台市歴史民俗資料館、市民文化事業団の施設や奥松島にある縄文広場とは元々交流があった
- ・今回、他の施設と協力し合うことはできなかったが、これから縄文関係の施設同士連携して助け合いたい
- ・石器を寄贈しに来館する方がまれにいる
- ・縄文遺跡と震災や津波との関わりについて質問されることが多くなった。また講演を依頼されることもある

2-8) 仙台市天文台

ヒアリング日時：2012年12月11日(火) 13:00～15:00

事業企画担当：小野寺正己氏，大友次男氏



- ・開館年：1955 (昭和 30) 年 2 月
2008 (平成 20) 年 7 月
- ・住所：仙台市青葉区錦ヶ丘 9 丁目 29-32
- ・面積：建築面積：4,794.6m²、延床面積：6,056.24m²
- ・設計：NTT ファシリティーズ
- ・施工：戸田建設・橋本店 JV
- ・構造：鉄筋コンクリート造
- ・規模：地上 3 階
- ・年間来場者数：平成 23 年度 150,185 人 (平成 24 年 4 月 1 日から 4 月 15 日までの間は東日本大震災のため休館)
平成 22 年度 164,613 人 (平成 23 年 3 月 12 日から 3 月 31 日までの間は東日本大震災のため休館)
平成 21 年度 201,582 人

被害状況

■プラネタリウムの被害

ライト一個破損(マーブルライト)

■プラネタリウム以外の被害

- ・壁クラック
- ・オープンスペース天井のダウンライトのカバー外れ(約 10 個、落下はなし)
- ・望遠鏡ひとみの軸擦れとエンコーダーの線切れ(震災以降解体 → 軸修正 9 月 30 日頃まで)
- ・展示用ワイヤー外れ
- ・照明機材擦れ

※エンコーダーはドイツ製のため取り寄せと交換に時間がかかった

(A) 施設管理担当：

1. 地震発生当日 2011 年 3 月 11 日 (以下、3.11)

1) 地震発生時の避難の状況

来館者：展示室 2 名、プラネタリウム 43 名 計 45 名

職員数：職員 9 名 維持管理：5 名 計 14 名

合計 59 名

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

- ・大きな流れ揺れが収まり次第、西駐車場に避難
- ・バスで来館したお客をバス停まで送った(愛子観光バスはまだ動いていた)
- ・職員 10 名が館で待機(自家発電)
- ・15:00 西駐車場に避難
- ・16:00 バスでの来館者見送り
※周辺から避難してくる人はいなかった

2. 震災直後 3月 12日～3月末日までの期間

1) 職員の業務

- | | |
|------------|---|
| 3月11日～ | 職員の安全確認 |
| 3月14日 9:40 | 電気回復 |
| 3月27日 | 水道回復 |
| 3月30日まで | ネットワークや建物の検査・修繕に入る人たちへの対応(スタッフ2～3名ずつ交代で)
電気回復に向けた漏電などのチェック |
| 4月15日まで | 修繕工事(開館に必要な工事)終了
※4月7日の余震を受け、ライト擦れなどはあったが致命的な損傷はなく15日に再開 |
| 4月15日 | 施設再開
※仙台市から早期再開せよの連絡あり(再開を急ぐ理由は明確ではなかった) |

■PFIにおける災害復旧に対するリスク分担

震度5以上の場合にはリスク(大規模修繕)ということになり、仙台市に負担がいく仕組みになっている。仮に1年間の維持費を100だとした場合、1を事業者負担、99を仙台市が負担する仕組みになっている。

3. 再開までの期間

1) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

天文台の事業者(SPC)である商社から食料などが送られてきた。

4. 施設再開後

1) 来場者に対する災害対応における留意・確認点

プラネタリウム投映時に避難に関するアナウンスをするようにした(一番被害が少なく短期的には安全であることや避難経路など)。

2) 施設貸出しに際する留意・確認点

- ・ホール内に昼食用テーブルを並べていたが、避難の関係上取り外した
- ・警備員室に地震計モニターを設置し、迅速な伝達が可能になった
- ・防災訓練(地震対応)を開始した→緊張感のある雰囲気できている
→改善策が見えてきた
- ・震災の展示(地震のメカニズムなど)

3) 管理・運営方法で震災前と変更した点

- ・2012年3月11日プラネタリウムの特別投映を実施
- ・利用者の大きな変動はなかった
 - 2010年度：実入館者16万人
 - 2011年度：実入館者15万人
 - 予約のキャンセルや移動があった。
- ・市内の中学校の見学で、交通局も含めた予定の組み直しがあった

5. その他

1) 管理・運営方法について、今回の震災の経験を反映させようと検討している課題など

- ・JAPOS（日本公開天文台協会）にて震災の発表などを行っている
 - 但し新たな災害に対してどのように生かすのかが明確ではない
 - 大変でしたねで終わってしまう可能性もある
- ・満員状態の際に現状ではスタッフの数が足りない気がしており、避難訓練などでも満員時の対応を具体的に想定して訓練をする必要はある

2) 地域との関係において震災前後で変わった（変えざるをえない）点

- ・再開時、年間パスを持っているようなサポーターを中心に「待ってたよ」という雰囲気があった。
- ・震災を通して新たなコミュニケーションが増えた

2-9) 仙台文学館

ヒアリング日時：2012年10月23日(火) 13:00～15:00

施設管理担当：成田啓一氏 事業企画担当：赤間亜生氏

- ・開館年：1999(平成11)年3月28日
- ・住所：仙台市青葉区北根2丁目7-1
- ・面積 敷地面積：62,968m²、建築面積：2,377m²、
延床面積：4,693m²
- ・設計 (株)ネオタイト建築計画(基本設計)
- ・施工：戸田建設(株)・仙建工業(株)JV
- ・構造：鉄骨造、一部鉄骨鉄筋コンクリート造
- ・規模：地上3階
- ・年間来場者数：平成23年度27,209人、平成22年度37,388人、平成21年度48,333人



被害状況

■建物の被害

- ・1階エントランスホール天井パネル落下
- ・2階エントランスホールの木製床タイルが、空調用冷温水管断裂による漏水で吸水し膨張、床全体がゆがむ
- ・2階天井の照明器具、空調ダクト等が脱落、落下
- ・3階常設展示室入口天井パネル落下
- ・エレベーター塔屋廻り表面亀裂
- ・外部軒天落下

■人的な被害

特になし

■資料等の被害

収蔵書架の移動・振動によって書籍が散乱

※収蔵資料の破損等は報告されていない

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年 3月 11日 (以下、3.11)

1) 地震発生時の避難の状況

来館者：22名

職員数：職員8名 警備員2名 設備1名 厨房1名 受付3名 収蔵庫1名 スタジオ1名 計17名
合計39名

利用者は外に避難させたが、地震災害時のマニュアルの作成や避難訓練を日常的に行っていた訳ではなく、職員の動きはスムーズにはいかなかった。

2) 3.11当日の施設閉鎖までの経緯

館の外に避難→2人1組で被害状況の確認→幼少の子供がいる職員を優先に帰宅させる。

3) 避難時において、困った点

スタッフが避難誘導などに不慣れであった。

2. 震災直後 3月 12日～3月末日までの期間

- ・3月中は基本的に散乱した本の片づけ（明るいうちに帰宅）
- ・瀬名秀明企画展の資料の対応
- ・(普段なかなかできなかった)資料の整理

1) 地震発生当日に普段の用途と変えて使用した部分

基本的には休館。用途変更はなし。

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

- ・落下パネルの撤去さえ終われば運営再開は可能という話であった。しかし漏水による床のゆがみがなかなかとれず、目途がつかなかった
- ・再開(6月22日)の1か月前にアナウンスした
- ・ビス打ちが必要であったため、ビスを打つ際の騒音の関係で再開前に工事した

2) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中で職員が主体となって関わった業務

3月中と同じ。

3) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

特になし。逆に受付業務のスタッフなどは他の施設に応援に行った。

4) 施設閉鎖中の震災前に利用していた市民や活動団体との連絡

発災後かなり時間が経過してからお見舞いの連絡が来ることはあった。

5) 再開までの復旧過程で、参考とした資料及び事例等

事前に館としてリスクマネジメントを行っていた為、大きな被害になりにくいという点があった。

4. 施設再開後

1) 来場者に対する災害対応における留意・確認点

- ・職員は意外とパニックにならず、ある程度適切な判断ができていた
- ・足元の木製パネルにシールを貼って注意をうながした（再開後当初は来館者用に掲示も行った）

2) 施設貸出しに際する留意・確認点

震災に関しては全ての情報を公開することで利用者への説明に替えている。

3) 利用状況で変化した点

- ・文学館まつりにおいて年齢層に変化が見られた(シニア→ファミリー)
- ・企画展の日数と来場者が増加した
- ・里山整備によってウォーキングで訪れる人は少し増えた
- ・昨年度は来館者が減少したが、今年度はその分戻って来た感じである

5. その他

■エレベーター塔の被害から、何か変化はありましたか？

独立した造りのため被害が大きかったが、エポキシ樹脂を注入する修繕をした。

■最終の復旧工事が終わったのはいつですか？

2012 年1 月の中旬。

(B) 事業企画担当

1. 再開までの期間

1) 利用者に対する災害対応における留意・確認点

- ・文学館以外での企画の場合、災害時対応の打ち合わせが増えた
- ・揺れた時の来館者への対応
- ・避難の誘導方法の確認

2) 企画立案・運営方法で、震災前と比較して変更した点

- ・展示作業、業務に対してより慎重になった
- ・展示方法も変化した(ワイヤー → 釘打ち)
- ・震災を踏まえた企画に対しては、十分に内容を検討して慎重に扱っていきたい
- ・地震後は以前よりも言葉や表現への気配りを心掛けている

4. その他

1) 地域との関係において震災前後で変わった(変えざるをえない)点

大きくは変わっていない。まず普通に戻すことが一番大事。もとに戻って来た人もいる中で、まだ全く戻っていない人もいて、そんな中で文化・文学作品の言葉がどんな意味を持つのか、それをずっと考えている。

■震災を経験したことで、他の文学館から情報提供などの打診などはありますか？

全国文学館協議会に出席した時に震災に対する話題が出たり、経験を踏まえた発表を求められたりする。

■今後想定されている課題は？

・芦屋市の谷崎潤一郎記念館では、阪神大震災の後、運営していた外郭団体がなくなったという体験をきかされており、仙台市でも予算縮小や査定がシビアになることなどが想定される。

2-10) 東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館

ヒアリング日時：2012年10月30日(火) 13:00～15:00

施設管理担当及び事業企画担当：本田秋子氏

- ・開館年：1989（平成元）年6月23日
- ・住所：仙台市青葉区国見一丁目8-1
- ・構造：鉄骨鉄筋コンクリート造
- ・規模：東北福祉大学 国見キャンパス 2号館 1・5・6階
- ・年間来場者数：平成23年 3,289人、平成22年度 15,000人



被害状況

■建物の被害

- ・天井のルーバー落下
- ・クラック
- ・スプリンクラーの擦れ
- ・ガラスの割れ

■人的被害

特になし

■資料の被害

土器、陶器の破損（借用品 10 点、収蔵品 16 点）

※借用品は修復して返却

■備品等の被害

- ・可動式の展示ケースの転倒
- ・収納棚の移動

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日(以下、3.11)

1) 地震発生時の避難の状況

- ・来館者：0階(展示品入れ替えのための休館日のため)
- ・職員数：職員6名(学芸員2名、事務員3名、研究1名) 学生2名 展示業者4名 計12名
- ・地震発生直後、展示入れ替え作業を中断し、大学の総務課の指示で館外へ避難。施設に施錠し、立ち入り禁止とする

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

15:30 広場で待機。大学の災害本部に招集され、そちらの業務を行う

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

1) 職員の業務

*帰宅できない学生への対応(震災後5日間、6名交代制で泊まり込み)

- ・学食冷凍庫の食材の炊き出し
- ・学生の安否確認
- ・保護者の対応
- ・関係者の出入りの確認
- ・トイレの管理

*工芸館の業務

- ・転倒したものを起こす
- ・収蔵品の整理、片付け(段ボールに入れる等)

2) 施設内(建築、設備、備品、資料など)の正確な被害状況の把握

- ・次に工芸館に入ったのは3月13日学生2名 業者4名(日通美術品課2名、表具関係2名)
- ・3月13日9:30に学芸員2名が目視で1、5、6階の被害確認。ヘルメットを着用し15～20分に1度建物から出るようにした

1) 復旧支援などでの協力者の来訪

震災後1週間以内に、大学の営繕課に依頼された業者が来館した。

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

夏期休業中 改修工事

10月5日 一部開館(1階のみ)

→学生の使う施設を優先的に改修するため、当初工芸館は1年間閉館の予定だった

2012年4月 全館開館

2) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中でスタッフが主体となって関わった業務

学芸員：収蔵品の片付け、整理

借用品の修復、返却

新しい企画、展示の考案

秋田県仙北市の美術館への作品の貸し出し（10月）

事務員：大学の事務

3) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

7月19日、9月9日 文化財レスキュー来館。

- ・石巻文化センターの資料 298 件（被害を受けていないもの）を工芸館に保管してほしいとの依頼
- ・工芸館の書類の搬入を手伝ってもらう
 - ※工芸館から石巻へ行くことはなかった
 - ※破損した借用品の修復の際、博物館に東京の業者を紹介してもらった

4) 施設閉鎖中の震災前に利用していた市民や活動団体との連絡

特になし（主に学生向けであり一般向けではない）。

4. 施設再開後

1) 来場者に対する災害対応における留意・確認点

- ・サイン計画は避難経路がわかりやすいようにしている
- ・節電を呼びかける表記をするようになった
- ・人員配置を検討

2) 管理・運営方法で震災前と変更した点

従来、会期中無休だったが、企画展中も休館日を設けるようにした（日・祝日）。

3) 利用状況で変化した点

年間利用者数：震災前 16,000 人 2012年度 12,000～13,000 人（予想）に減少する見込み。

5. その他

1) 管理・運営方法について、今回の震災の経験を反映させようと検討している課題など

展示の仕方や固定の仕方を変更した。

2) 地域との関係において震災前後で変わった（変えざるをえない）点

- ・他の施設の視察などを定期的に受け入れるようにした
- ・市民の方から郷土玩具を寄贈したいという申し出があったが、収集方針が合致しないため、歴史民俗資料館を紹介し、受け入れて頂いた

3) 地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じる点

- ・市民が文化財を寄贈したいときに、受け入れ可能な博物館を市民に示す必要がある

- ・ 1つでも多くの資料や作品を残す
- ・ 地域という訳ではないが、大学との連携の中で、震災に関して様々な試みを考える必要がある

(B) 事業企画担当

1. 再開までの期間

1) 再開当日、使用者や来場者の様子から特に感じたこと／市民（活動団体含む）から、寄せられたメッセージ

- ・ 開館してうれしいという声が寄せられた
- ・ 静岡市の芹沢銈介美術館、千葉県柏市の郷土資料館で応援の展覧会が行われた（2012年1月）
- ・ 北海道の巡回展も支援してくれた

4. その他

1) 企画立案・運営方法について今回の震災の経験を反映されようと検討している課題

- ・ 芹沢銈介の思想を研究し展示に活かすべき（その土地の暮らしや文化を伝える）
- ・ 工芸品などの修復についても、東北の作品は東北で修復できるシステムや、そのような産業、人材を育てていくことも重要である

2-11) 仙台市科学館

ヒアリング日時：2012年12月12日 14:00～16:00

施設管理担当：玉川勝美氏



- ・住所：仙台市青葉区台原森林公園4番1号
- ・開館年：1990(平成2)年9月
- ・面積：敷地面積：16,144m²、建築面積：5,374.99m²、延床面積：12,207.70m²
- ・設計：建築・構造・設備：久米建築事務所
- ・施工：飛鳥・東急・中城・栄和建设共同企業体
- ・構造：鉄骨鉄筋コンクリート造及び一部鉄骨造
- ・規模：地上5階、塔屋2階

被害状況

■建物の被害

- ・壁クラック
- ・3階・4階展示室／特別展示室吊天井一部落下

■人的な被害

特になし

■資料の被害

- ・「古象の行進」(マンモス、ナウマンゾウ、シンシュウゾウ、アウグステンゾウ、アフリカゾウ) 破損
(台座部分に大きな損傷、一部に倒壊の恐れ)
- ・化石標本類の位置 擦れ多数
- ・展示物(「仙台平野を渡る雁」他) 落下多数
- ・「静電気でダンス」 転倒
- ・「樹木」基礎部分 破損多数
- ・「トリチェリーの真空」 破損(水銀が散乱)
- ・「鉄分の調べ」内部容器 破損
- ・「香りファクトリー」内部容器 転倒→薬品漏えい
- ・「ヤコブのはしご」 転倒倒壊
- ・標本類 位置ズレ(「電波を見る」傾斜等)、転倒多数
- ・書類、図書、ビデオテープ 落下散乱多数
- ・図書閲覧室 図書散乱多数
- ・収蔵庫等の大型標本棚 移動

■備品、設備等の被害

- ・実験室、研究室ロッカーの一部 転倒、水槽水流出、棚からの落下物多数
- ・大型冷蔵庫 移動

- ・受変電設備 制御室遠隔操作不能
- ・空調設備 高電圧受電設備制御用バッテリー充電不能
排気ダクト等破損（5階ダクトの被害甚大）
エントランスホール天井ダクト落下の恐れ
- ・温冷水発生機 防振、防水装置破損（アンカーボルトが破断し本体が移動）
- ・給排水設備 高架水槽からの配管破損→漏水
- ・エレベーター ドア外れ、ガイドローラー破損
- ・エスカレーター ギア破損

■その他の被害

- ・地割れ
- ・東側市道が約 20mにわたり地盤沈下

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日（以下、3.11）

1) 地震発生時の避難の状況

- ・来館者：14名
- ・職員 50名程度（業者約 30名程度も含む）
- ・来館者は外の広場に移動
- ・17:00には来館者は帰宅
- ・スタッフが手分けして目視で被害確認
→4階の排気ダクトの損傷などを確認。つり天井が広範囲で崩落
- ・20:00頃にはスタッフも全員帰宅
- ・自家発電は稼働

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

1) 職員の業務

- ・3月中は館内の片付け
- ・継続して展示品の修復作業
- ・3月中に業者による基本点検と応急対応は終了
- ・3月13日の夕方に電気が復旧。2週間後に水道が一部復旧（西側のみ。東側は4月末に復旧）
- ・4月14日ガス復旧

2) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

3月下旬から4月上旬、ボランティアの協力により片付け。ボランティアからは早い段階から支援の申し出はあったが、建物の安全が確認されてから協力を頂いた。特に収蔵庫の被害が大きく、その部分の片付けで支援を頂いた。

3. 再開までの期間

- ・基本的な改修工事は、6月末位までに終了
- ・3月中には再開に向けた方針を立てた
- ・4月7日の地震のほう展览展示物の被害が大きかった

- ・ゾウの骨格標本の修復が難しかった（当初は京都の業者に積算を依頼）
- ・市の予算の執行許可が下り次第修復依頼を開始

4. 施設再開後

1) 来場者に対する災害対応における留意・確認点

大人数集まる場合は必ず避難経路を案内するようになった。避難経路を再確認。団体客用の HP で伝達。

2) 管理・運営方法で震災前と変更した点

- ・再開しながら、2011 年秋から天井等の耐震工事などを行う。4 ヶ月間は部分開館（夏の特別展の際は応急工事を行い、全面開館）
- ・夏休みの展示は、空調の状況がわからない部分が大きく、再開時期は 8 系統のうち 2 系統は効かなかった。扇風機などで対応

3) 利用状況で変化した点

- ・理科教育の支援を目的に、震災前から県外の遠足や修学旅行の受け入れを行ってきた。再開した年度は大幅に減少したが、今年度はその数が少し戻ってきた
- ・再開後の特別展では一日 2000 名の来場者があった。通常は 1200 名前後、開館以来最大の来場者
- ・科学館の中学生対応講座における地学の分野の講座の中で、地震のメカニズムを説明するようになった。選択講座だが 2011 年の後半では地学が一番人気があった

5. その他

■展示品の修復で難しかった点は？

- ・展示の固定方法は、象の展示は 4 本から 6 本足にして固定。修復自体は京都の業者に発注した
- ・細かい展示の修復は業者発注と館内のスタッフにより対応

■改修工事のポイントは？

- ・つり天井補強方法などを変え必要な部分以外は撤去（仙台市は補正予算で改修工事予算を策定）
- ・全国の科学館関係のシンポジウムにて報告

(B) 事業企画担当

1. 企画立案・運営方法について今回の震災の経験を反映されようと検討している課題

「るねっ・サイエンス（科学の力で復興するということ）」をテーマに掲げている。原子力発電所の復旧作業対応ロボットが発災前から館内に展示物としてあったので、それらを利用して展示している。

■文化財レスキュー関係

石巻文化センターなどへ文化財レスキュー等に職員を派遣した。自然科学系の博物館は県内でも総合的な科学館は仙台市科学館だけなので、該当する部分は担当している。

- ・文化財レスキューより預かっているものを展示予定
- ・来年度震災関係の展示コーナーを設置予定
- ・蒲生干潟の状況を研究しているので、その状況も展示予定

2) 地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じる点

科学館では、地域というよりも学校とのつながりが強く、このつながりが震災が起きる前よりも非常に強くなった。学校の理科教育のサポートが重要な機能なので、理科室に被害があった（試薬がこぼれたなど）との問い合わせがあり、学校とのつながりを再確認した。

2-12) 東北大学総合学術博物館 (資料のみ)

- ・開館年：1998（平成10）年4月（理学部自然史標本館としては平成7年10月）
- ・住所：仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
- ・面積：建築面積：1,747 m²
（収蔵面積：742 m² 展示面積：498 m²）
- ・設計：久米設計
- ・施工：佐藤工業
- ・構造：鉄骨鉄筋コンクリート造
- ・規模：地上4階
- ・年間来場者数：平成21年度 15,767人



被害状況

■建物

特になし

■人的被害

特になし

■文化資料

展示標本の転倒、破損

クジラ全身骨格標本の左ひれ支持の亚克力板基部割れ

クジラ全身骨格標本の組み立て姿勢の崩れ

2階収蔵室、2段積みの収納棚の上部落下、内部の標本は軽度の破損

3階収蔵室、固定していない収納棚1台が倒れて斜めになり、棚の天板上に載せていた標本が落下、多くが破損

3階収蔵室、引き出しではなく、ラック式移動棚に収納していたコンテナ数箱が床に落下、標本が散乱

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日 (以下、3.11)

来館者：4名（展示室）

職員数：職員3名（1階管理室、整理室）

業者1名（2階収蔵室）

1) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

地震発生、揺れが大きくなってきて、職員 1 名が展示室へ行き、来館者に対し建物の外に出るよう指示

(2 階にいた業者 1 名は揺れが収まった後で建物外に避難)

→避難集合場所となっていた標本館駐車場に集合し、安否確認

→余震で合同棟が大きく揺れて見え、集合した避難者全員はキャンパス入り口のバス停付近に移動

→地学棟 6 階にいた職員 1 名が、地学専攻での安否確認をすませた後(専攻毎に安否確認)、標本館内部の簡単な状況確認にあたる

→数名の職員で手分けして各部屋のブレーカーを落とし、電化製品のコンセントを抜く処置

(屋外に避難していた来館者 4 名はおそらくタクシーを利用して市街へ向かったと思われる)

→館長の指示により、さしあたり用務のない職員は 16 時過ぎより随時帰宅

→西教授の指示により、帰宅困難な学生や理学部を訪れていた受験生の緊急宿泊場所として、標本館 1 階ロビーを使用

2. 震災直後 3 月 12 日～3 月末日までの期間

3 月 12 日 オウムガイ水槽のポンプの乾電池交換

3 月 14 日 標本館内の詳しい状況調査

3. 復旧・復興の状況、研究や教育への影響

電気の復旧、標本館および博物館のサーバー、ネットワーク、ホームページ、メール等の復旧は、3 月 22 日におこなった。

【標本の移転・仮収蔵施設の確保】

a. 旧風洞実験棟およびプレハブ収蔵室からの資料標本の移転

理学部キャンパス内の旧風洞実験棟収蔵庫(約 250 m²)が、地震により地盤崩壊の危険があるため使用不可となり、収蔵していた金属博物館資料、古生物学標本、考古学資料の約半分を、いったん自然史標本館展示室に緊急避難させた(4 月)。

別途収納場所として理学部キャンパス内の保管スペース(約 50 m²)と片平キャンパスの旧男声合唱部練習場のスペース(約 150 m²)が確保できたため、6 月 7・8 日にその緊急避難分を含めて多くを搬入した。その後旧風洞実験棟と古いプレハブ収蔵室(約 50 m²)が取り壊されることとなったため、10 月 26 日に、残されていたものすべてを追加で搬入した。

そのさい理学部キャンパス内に新設されたプレハブ収蔵室(約 50 m²)を新たに確保し、そこにはおもに金属博物館の文献資料と大型標本を搬入した。

旧風洞実験棟収蔵庫は建物外の地面に発生した亀裂が内部にも及び、床に亀裂が入った。

b. 片平キャンパス旧男声合唱部練習場からの資料標本の移転

6 月と 10 月に資料標本を移転した片平キャンパス旧男声合唱部練習場が取り壊されることとなったため、旧青葉山ゴルフ場クラブハウス内に収納スペース(約 180 m²)を確保し、再度移転した(2012 年 2 月 20・21 日)。

c. 旧金属博物館敷地に残置していた大型資料の移設

青葉山にある旧金属博物館の建物が地震の被害が大きいため取り壊されることとなった。

建物内および敷地に残置したままでいた大型の資料 7 点のうち、2 点を理学部キャンパス内に移設した（2012 年 3 月）。ほかの 5 点については金属材料研究所が引き取ることになっている。

【展示室の補修工事、再開展示室内部について】

補修工事は、破損した標本を修復、補強したうえで、新たに固定を施した。クジラ全身骨格標本については 2011 年 6 月中旬に足場を組んで本格的な修復と点検工事を実施し、ひれ部については揺れても構造部に当たらないように角度を変更した。

また地震のため延期していた展示ケースのガラスに飛散防止フィルムを貼る加工を業者により実施した。

- ・節電のために展示用の照明を間引く作業もおこなった
- ・緊急時とくに地震発生時の対応マニュアルも作成した
- ・物品の再配置や清掃など、展示室およびロビー周りの整備を済ませ、また土日の受付体制も復活させて、7 月 1 日より展示室の一般公開を再開することができた

なお展示室、収蔵室の復旧作業および標本移動作業には地学専攻技術室、地学の学生・院生の協力を得た。

【節電対策について】

使用しない機器のコンセントを抜き、照明を間引き、LED に交換するなどして、消費電力を削減。

【研究への影響について】

震災発生より 1 週間程度は研究棟への立ち入りができず、研究室の被災状況を確認することすらできなかった。

その後は、設備・備え付け機器の転倒、落下、破損等の状況を点検し、復旧に向けての活動をおこなっていたが、直接の被災にくわえて、食料、ガソリン不足などから出勤困難の教職員が増加したこともあり、研究活動の前提となる復旧活動は困難をきわめた。

復旧中に何度か大きな余震にみまわれたことも、このような活動の遅延の原因となった。

また、すぐさま研究者個人の研究を再開するよりも、自然史系博物館の重要な使命のひとつとして、東北地方一帯、とくに沿岸部にある被災施設の標本レスキュー活動を優先するべきだと考え、震災発生のおよそ 1 ヶ月後よりスタッフ数名が被災各地において標本回収をおこない、その大半を標本館等に収容した。

1 ヶ月後というのは、さしせまった人命の危機がなくなりつつあった時期のことで、各施設の被災状況の確認自体は震災発生の数日後より開始していた。

標本回収に一定のめどがついたのは、秋をすぎた頃である。

さらに、7 月までは標本館の早期開館のため、教員の研究室に所属する学生にも協力してもらい、標本を一時保管場所へ移動をおこなうなど、学生の研究活動にも影響が出てしまったが、博物館の各種機能の復旧のため、利用できるさまざまなマンパワーを注いだ。

4. 災害時に役立ったことや教訓、改善すべき問題点

- ・携帯ラジオ、電灯を多数備えるべき
- ・避難集合しているさいに、安否確認のほか、皆で情報を共有するなど、何か実のあることができないか。解散指令がでるまでの約 2 時間で一人一人が何かできることはなかったか
- ・練りゴムによる展示標本の固定はとても効果がある
- ・収蔵室で棚の固定を施す必要がある
- ・ラック式の移動棚で、何かよい転倒防止策がないだろうか
- ・地震後、標本館を離れるとき、来館者の行動の把握ができていなかったのも、移動の安全が確保できた後の誘導方法（たとえば、公共交通機関が動かない場合にタクシー利用を促す、徒歩移動のさいの安全なルートの説明、地図の準備など）が必要と思われる

5. 震災に関連した学術活動、社会貢献活動のリスト

- ・標本レスキュー活動、宮城県沿岸域で化石など自然史系の標本を展示、収蔵している以下の施設で、被災状況を調査し、残されている標本の救出作業をおこなった
- ・関連学会への金銭的支援の呼びかけもおこなった
 - a. 南三陸町歌津の魚竜館
 - b. 石巻市鮎川のおしかホエールランド
 - c. 石巻市雄勝の雄勝公民館
 - d. 女川町のマリンパル女川
 - e. 気仙沼市波路上の岩井崎プロムナードセンター
- ・総務部広報課と共催で特別展示「東日本大震災―何が起こったか―その記録と解析」を開催
内容：河北新報による東日本大震災の写真記録、今回の地震と津波についての東北大学の研究、東北大学の災害対応を紹介
会場：片平キャンパス・エクステンション教育研究棟広報スペース
期間：2011 年 9 月 28 日～ 2012 年 3 月（さらに 6 月 29 日まで延長）
- ・「東日本大震災―何が起こったか―その記録と解析 第 2 弾」を開催
内容：震災から 1 年が経過して明らかになった東日本大震災の全容と、震災からの復興に向けての東北大学の取り組みを紹介
会場：片平キャンパス・エクステンション教育研究棟広報スペース
期間：2012 年 7 月 18 日～
- ・企画展示「復興、南三陸町・歌津魚竜館―世界最古の魚竜のふるさと―」を開催
内容：被災した歌津魚竜館への総合学術博物館の文化財レスキュー活動を紹介し、そこに存在した展示を再構築することで、郷土と自然史資料との関係を学ぶ

会場：仙台市科学館エントランスホール

期間：2012年2月7日～3月25日

・震災遺構の3Dデータを公開に向けて収録・整備

内容：震災により甚大な被害を受けた建造物等の取り壊しが進むなかで、これを未来に伝えるため3Dデータとして残し、研究資料また一般公開のために整備する

期間：2013年3月～

6. その他

2011年7月8日 秋篠宮ご夫妻による総合学術博物館の視察（歌津魚竜館被災標本等を説明）

2-13) 福島美術館

ヒアリング日時：2013年3月6日(水) 13:30~16:00

事業企画担当：尾暮まゆみ氏

- ・開館年：1980(昭和55)年6月
- ・住所：仙台市若林区土樋288-2
- ・面積：敷地面積：1,953 m²、建築面積：198 m²、
延床面積：789 m²
- ・設計：木田建業一級建築士事務所
- ・構造：鉄筋コンクリート造
- ・規模：地上4階
- ・年間来場者数：平成23年度 0人(H22, 3, 12~H24, 12, 18 休館)、
平成22年度 1,909人、平成21年度 1,974人



被害状況

■建物の被害

- ・北側壁面に亀裂
- ・ドアの開閉が困難
- ・雨漏り

■人的な被害

特になし

■資料等の被害

収蔵棚の移動、展示物の転倒

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日（以下、3.11）

1) 地震発生時の避難の状況

来館者：7名

職員数：職員2名 サポーター1名 計3名

合計10名

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

発災直後 職員2名とサポーター1名に分かれ、職員は4階貸室で来場者の安否を確認、サポーターは1階で待機。

15:30 来館者全員帰宅

16:30 施設に施錠しスタッフ全員帰宅

3) 避難時において、困った点

ドアの開閉が困難な部屋があった

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

※15日から25日までは午前勤務

13日 スタッフ1名が施設のブレーカーを下げるため出勤

14日 スタッフ1名がセキュリティをリセットするため出勤

その際館長に近況報告

15日 サポーター7名の安否確認終了

収蔵室の被害状況を記録

16日 電気、空調業者が点検のため来館

24日 館長が現場確認のため来館

25日 常設展示の掛け軸を撤収

資料の避難優先順位を検討開始する

1) 地震発生当日に普段の用途と変えて使用した部分

基本的には休館。用途変更はなし。（古い建物のため、建物の安全が確認できないため）

3. 再開までの期間

4月5日 建物診断のため業者来館。（診断を依頼していたが、民間という理由で対応に時間がかかった）

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

- ・私立ミュージアムのため、施設運営者の判断が基本となる
- ・施設改修費用の捻出が難しく、改修し再開するという決定がなかなかできなかった
- ・具体的な再開へのスケジュールが決まらなかったため、実際に出来る作業は限られていたことと、それらの状況を打開するための具体的な方法が無く困っていた

- ・2011年10月頃、宮城県のミュージアム関係の集まりがあり、そこで福島美術館の状況などを伝える機会があり、それ以降様々な人がつながったり、情報や支援などが来るようになり、施設を再開することが現実化していった
- ・実際に宮城県などの対応により、施設改修の補助がもらえることになったが、具体的なアクセス方法や窓口等がわからず、そこに至るプロセスまでに時間を要した
- ・4月に工事日程が決定。「七福絵はがき募金」による第1回目の寄付を頂いた12月19日に再開するため、逆算しながら再開までのスケジュールを決定した

2) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中で職員が主体となって関わった業務

- ・資料の整理

資料を移動する優先順位を作成した。(1)伊達家関連資料 (2)優品図録掲載資料など)

- ・七福絵はがきの作成

修繕及び再開にあたり必要な資金(修繕費の積算が約1000万円(宮城県からの補助は約1/3))の寄付を関係者や広く市民の方々にお願いした。寄付を頂いた方に、そのお礼を兼ねて、美術館の収蔵作品から「おめでたい・幸せ・ゲンキ・絆」のメッセージを載せた7作品を選び、絵葉書を作成した。関係者やマスコミなどに取り上げられ、募金とともに七福絵はがき自体が広く知られるようになり、多くの寄付につながった。

3) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

- ・4~5月、梱包資材が全く入手できなかった時期に、サイトで被害状況を知った関西方面の関係者から梱包資材の提供を受けた
- ・具体的な情報提供については、宮城学院女子大学の井上先生に尽力いただき、研究室の学生9名(週3日2~4名ずつ)に資料梱包作業などに関わって頂いた
- ・井上先生の呼びかけで、震災関係のシンポジウムで福島美術館の状況を報告する機会を頂き、そこから様々な支援の輪が広がった
- ・7月10日から東北芸術工科大学の学生に博物館実習として資料の梱包整理を手伝ってもらった

4) 施設閉鎖中の震災前に利用していた市民や活動団体との連絡

七福絵はがきの販売などにより、多くの方から寄付金を頂いた。

4. 施設再開後

2) 施設貸出しに際する留意・確認点

以前に増して、展示品の固定の仕方や収納などには気をつけるようになった。

3) 利用状況で変化した点

七福絵はがき等によって福島美術館を知り、来館してくれた方がいた。今回の七福絵はがきは、美術館と来館者をつなぐ有効な手段であると実感している。

(B) 事業企画担当

4. その他

1) 地域との関係において震災前後で変わった(変えざるをえない)点

福島美術館の存在を知らない仙台市民が多いので、知名度を上げたい。七福絵はがきのプロジェクトがメディア等に取り上げられて、はじめて福島美術館の存在を知った方々もいた。

■ 震災を経験したことで、他の施設から情報提供などの打診などはありますか？

震災を機に、鹽竈神社博物館、菅野美術館、瑞鳳殿、福島美術館の4館連携の集まりを行うようになった。具体的な事業企画というところまでは未だ難しいが、双方の情報交換や一部作品の貸出などのことを具体化させつつある。

■ 今後想定されている課題は？

- ・私立美術館であるため、積極的にネットワークに参加したり、情報を集めたりしなければならない
- ・既存のミュージアム関係のネットワークは、公共のミュージアムを前提としており、その枠の中で様々な情報や具体的な事業などが、企画・実施されている。しかし、そのネットワークの外側にある私立ミュージアムは取り残される可能性が高い。実際に福島美術館は一時期まではそのような状況であった。また、現在でもそのような状況にある私立の特に小規模なミュージアムは存在しているかもしれない

→地域のミュージアムという点では、私立も公共も関係なく、そこに住む市民の人からはどちらも重要な存在だとすれば、それらのネットワークの在り方を考えていく必要がある。

2-14) 石ノ森萬画館

ヒアリング日時：2013年2月7日(木) 13:30～15:00

施設管理担当：西條允敏氏

- ・開館年：2001(平成13)年7月23日
- ・住所：石巻市中瀬2番7号
- ・面積：延床面積：1,979.11m²
- ・設計：(株)日本設計
- ・施工：(株)飛島建設 他
- ・構造：鉄筋コンクリート造、一部 鉄骨鉄筋コンクリート造、鉄骨造
- ・規模：地上3階
- ・年間来場者数：平成21年度 178,500人、平成20年度 171,000人、平成19年度 173,300人、平成18年度 185,200人



被害状況

■建物の被害

- ・1階部分浸水
- ・電気・空調機械設備、非常用電源、水回り機器類水没

■人的な被害

特になし

■資料等の被害

特になし(原画等展示物)、但し事務書類はほとんど流失

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日(以下、3.11)

1) 地震発生時の避難の状況

来館者：約20名

職員数：職員約10名

合計約30名

施設課長は施設、確認のため館内に残るが、周辺状況から避難できず。

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

館の外に避難 来館者→職員の順に避難

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

- ・市役所への報告
- ・避難者を指定の避難所へ移す

1) 地震発生当日に普段の用途と変えて使用した部分

施設に避難してきた人、津波のがれきに流された人、約40名を救助
施設3階のライブラリーと喫茶室を開放

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

- ・震災翌年2012年3月ごろ再開の機運が高まり5月工事発注
- ・6月～11月の5か月の工期で11月17日再開
- ・作品に関しては、関連団体のミュージアム(東京)に移送し、保存した
- ・石ノ森萬画館は石巻の復興のシンボルでもあるので、11月に一度再開し、改修後、2013年3月に全面リニューアルオープンを行う

2) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中で職員が主体となって関わった業務

2011年5月5日のこどもの日のイベントのため、職員が主体となり館内の清掃・整理を急いだ。
県内外でのイベント参加、グッズ等、商品の積極販売

3) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

2011年5月5日のイベント前には、100名ほどのボランティアにより主に外回りの清掃を行ってもらった。
大型のがれきは陸上自衛隊が除去してくれた。

4) 施設閉鎖中の震災前に利用していた市民や活動団体との連絡

- ・再開後に萬画館を訪れた方から、多くのメッセージが寄せられた
- ・マンガやミュージアム関連団体からの連絡・支援が多く寄せられた

4. 施設再開後

再開のイベント時に多くの来館者の方々に訪れて頂いただけでなく、その後も被災前よりも多くの来館者の方々に来て頂いている。

1) 利用状況で変化した点

- ・リピーター(年間パスポート利用など)が増加した
- ・再開後は被災前と比較して約1.5倍の来館者数

5. その他

■工事期間と費用について

- ・修繕工事は原状復帰のため6億円、リニューアル工事は展示品の更新などに1億4000万円
- ・期間はそれぞれ2012年6月～11月と2013年2月～3月

■再開に関わった団体は？

- ・マンガ関連以外の一般企業、団体からの支援が多数あった。
- ・鳥取で行われた漫画サミットでは寄付金を募り支援を受けた
- ・周辺施設ではグッズの販売を手伝ってくれた施設がある

(B) 事業企画担当

1. 再開までの期間

1) 企画立案・運営方法で、震災前と比較して変更した点

- ・震災時及び再開までのプロセスをパネルなどで展示している

2. その他

1) 地域との関係において震災前後で変わった(変えざるをえない)点

周辺の魅力ある施設が被災したため、石巻の人々の交流を支える役割、割合が大きくなった。4月からデスティネーションキャンペーンとして宮城が対象となっているだけでなく、石巻独自のまちづくりプログラムを企画している。それらの企画と萬画館が連動することで、まちづくりの重要な一翼を担うことを考えている。

■これから起こるかもしれない災害に対する対応は？

予算の関係もあるが、非常用電源などは浸水を免れるよう高所に設置すべき。

■今後、東南海の地域で気を付けるべきことは？

あらゆる災害を想定してのマニュアルの制作と、訓練をしておく必要がある。

今回の震災での経験を漫画家の方をお願いして、ストーリーを考え漫画にしていき、石ノ森萬画館らしく漫画で伝えていくつもりである。

2-15) 石巻文化センター

ヒアリング日時：2013年2月7日(木) 10:00~11:00
施設管理担当：佐々木淳氏(石巻市教育委員会 生涯学習課)

- ・開館年：1986(平成61)年11月2日
- ・住所：石巻市南浜町1-7-30
- ・面積 敷地面積：11,796.28m²、建築面積：3,615.18m²
延床面積：5,979.75m²
- ・設計：佐藤武夫設計事務所(現：株式会社佐藤総合計画)
(基本設計、実施設計)
- ・施工：戸田建設・遠藤興業建設工事共同企業体ほか
- ・構造：鉄骨鉄筋コンクリート造
- ・規模：地上2階、塔屋3階



被害状況

■建物の被害

- ・津波により建物1階が浸水

■人的な被害

特になし

■資料等の被害

美術資料、民俗資料、考古資料の津波による被害

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日(以下、3.11)

1) 地震発生時の来館者

来館者：数十名(ハローワーク関係者、着物の展示即売会準備の関係者)

発災時、指定管理者職員は来館者の避難誘導を行い、その後一部は帰宅

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

15:00頃 正職員、臨時パート職員解散、避難

津波警報が出たため、正職員一部避難

15:40頃 津波到来

- ・市民会館において翌日のコンサート準備に出向いていたので、指定管理者の職員は通常よりも少なかった
- ・博物館の学芸部門以外、管理運営は財団法人石巻市文化スポーツ振興公社(市の外郭団体)

- ・避難したまま翌日まで施設内にいた利用者1名いた

3) 避難時において、困った点

避難時にタイムラグが発生してしまった。

2. 震災直後 3月12日～3月末日までの期間

- 14日まで 脱出が困難であったため、文化センターへとどまる
- 15日から 施設閉鎖、市職員は避難所での物資輸送等を行う
- 18日 指定文化財・文化センターの資料安否確認
開口部へトラロープを張る
- 19日 ロビーに展示してあった資料を収蔵庫へ格納
- 31日まで 事務室のがれき撤去

※1日1回は誰かが建物に赴くようにしていた。

3. 再開までの期間

1) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中で職員が主体となって関わった業務

- 4月4日 文化財課の職員が文化財レスキューの下見のために来館
- 4月7日頃 全国美術館会議から電話連絡があり、救援を要請
- 4月20日から 文化財レスキュー現地入り、活動開始。資料の修復・洗浄等
- 2012年11月 廃校となる予定の湊第二小学校の校舎を改修し文化財の仮保管場
所とし、仮移転することを決定
- 夏頃 取り壊し決定
- 2013年2月下旬から 取り壊し
- 2013年度以降 随時、各施設に保管されている収蔵品を環境の整った仮保管施設（湊第二小学
校旧校舎）に仮移転

※現地復帰はなく、複合施設として再建することが決定している

※環境省から予算補助があり、被災建築物の解体撤去が決定している

2) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

- ・全国美術館会議、文化財レスキュー等の支援を受けた
- ・県内外の複数の文化施設にも資料を仮保管してもらっている
- ・2011年8月から9月にかけてボランティアによる瓦礫撤去が行われた

3) 施設閉鎖中の震災前に利用していた市民や活動団体との連絡

- ・寄贈・修復に関する相談を受けることがあった

4. その他

再開したら今回の震災から学んだことを盛り込みたい。

ネットワークが役立つのは発災から数日後であるため、それまで対応できるような文化施設をつくるべき。

2-16) リアス・アーク美術館

ヒアリング日時：2013年2月11日(月) 14:30～16:00

施設管理担当及び事業企画担当：山内 宏泰氏(学芸係長)

- ・開館年：1994(平成6)年10月
- ・住所：気仙沼市赤岩牧沢138-5
- ・面積 敷地面積：9,987m²、建築面積：2,340m²、
延床面積：4,601m²
- ・設計：早稲田大学石山修武研究室
- ・施工：熊谷組、小野良組、クマケー建設
- ・構造：鉄筋コンクリート造、一部鉄骨造
- ・規模：地上3階
- ・年間来場者数：平成23年度 0人(完全休館)



被害状況

■建物の被害

- ・天井の破損
- ・床、壁の亀裂・鉄板構造部のゆがみ・ガラスの破損

■人的な被害

特になし

■資料等の被害

- ・美術作品(立体)2点全損、1点部分損

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年3月11日(以下、3.11)

1) 3.11当日の施設閉鎖までの経緯

- ・発災後、即閉館
- ・高台の公共施設であるため、避難者が集まってきたものの、館内に人を入れることのできる状態でなかったため、館長が避難所としての使用は不可と判断
- ・自宅が危険なスタッフ数名は施設に残る
- ・深夜2時頃、生涯学習課課長が来館し、二次避難所に使えるか視察(結果、避難所にはならなかった)

2) 避難時において、困った点

津波警報が聞こえなかった。

2. 震災直後 3月 12日～3月末日までの期間

- 12日 スタッフ1名を施設に残し、他のスタッフは防災センター（避難所）で勤務
- 14日 支援物資保管場所として機能（展示室）
学芸員が数名戻る
電気復旧
- 15日 物資を展示室から移動するためボランティアが来館
- 16日 気仙沼の状況を記録すべく、自主的に「取材」として写真記録をとり始める
- 18日 電話復旧
全国美術館会議から救助が必要か確認の連絡が来る
- 23日 公務としての写真記録調査を始める

1) 地震発生当日に普段の用途と変えて使用した部分

- ・展示室を支援物資保管場所として使用（3月14日から）

3. 再開までの期間

1) 改修工事以外の復旧に際する業務と其中で職員が主体となって関わった業務

※学芸係長の山内氏が約40日間警備のため施設内に滞在

- 2011年4月6日 空調復旧。しかし(気仙沼・本吉地域広域行政事務組合組合から)許可が下りないため稼働せず
- 4月7日 余震により空調が故障
- 4月10日 再び空調復旧→(気仙沼・本吉地域広域行政事務組合組合から)稼働許可が下りないため稼働せず
- 4月末以降 施設の構造設計者が来館。構造上問題なしと診断
土地勘のある市内各所を重点的に調査し始める
- 5月18日 (気仙沼・本吉地域広域行政事務組合組合から)空調の稼働許可が下りる
- 5月19日 空調運転準備
- 5月20日 空調稼働（収蔵庫、1階展示室）
- 5月23日 (気仙沼・本吉地域広域行政事務組合組合から)施設修繕命令
- 6月 記録調査活動に集中できない状況になる
5か年計画の資料作成
- 7月 取材対応
- 10月 修繕のための公式調査
- 11月 復旧のための申請
- 2012年2月 着工
- 7月10日 完成検査

2) 再開までの過程における復旧支援などでの各種団体またはボランティアなどの訪問

- ・物資移動のためのボランティアの来館
- ・全国美術館会議から物資（机、パソコン等・被災物保管庫）の支援を受けた。展示用パネル準備の支援も受けた

4. 施設再開後

1) 施設貸出しに際する留意・確認点

常設展示が増えたため、貸館のための部屋が減った。

2) 利用状況で変化した点

地域外の来場者が多くなった（NPO関係、調査関係が多い）。

5. その他

震災以前の来館者はリピーターの方が多かった。

(B) 事業企画担当

1. 再開までの期間

1) 企画立案・運営方法で、震災前と比較して変更した点

- ・常設展示に震災関係の記録を加えた
- ・手描き展示開設パネル（水彩・鉛筆）をデジタルデータ化した

2. その他

1) 地域との関係において震災前後で変わった（変えざるをえない）点

- ・イベントのために使える部屋が減ったため、イベントを縮小せざるを得ない
- ・東北歴史民俗資料館など、他の文化施設等との関わりが増え始めている

2-17) 福島県立美術館

ヒアリング日時：2013年3月26日(火) 10:00~12:00

施設管理担当及び事業企画担当：伊藤 匡氏（学芸課長）

- ・ 開館年：1984(昭和59)年7月
- ・ 住所：福島県福島市森合字西養山1
- ・ 面積 敷地面積：60,500m²、建築面積：6,471.7m²、
延床面積：9,680.7m²
- ・ 設計：大高建築設計事務所
- ・ 施工：鹿島建設株式会社仙台支店
- ・ 構造：鉄筋コンクリート造
- ・ 年間来場者数：平成23年度 75,409人



被害状況

■建物の被害

- ・ 正面入り口の玄関(屋根が出っ張っている部分)の裏側の天井の化粧板が2枚ほど落下
落下の際にちょうどその真下、玄関のガラスの部分に当たりガラスが割れた
- ・ 空調機器配管の一部脱落
- ・ 常設展示室内照明レールの損傷
- ・ 企画展示室内仮設展示壁の歪み
- ・ 敷石等の破損、舗道の段差
- ・ 庭園内プールの排水漏れ

■人的な被害

特になし

■資料等の被害

- ・ 展示中の作品 彫刻とやきもの作品の一部および絵の額の破損
- ・ 収蔵庫内の作品 絵画と版画作品の一部および絵の額の破損

(A) 施設管理担当

1. 地震発生当日 2011年 3月 11日 (以下、3.11)

1) 地震発生時の避難の状況

来館者：約 100 名(当時はスタジオジブリレイアウト展を開催中)

スタッフ、職員、展覧会のブックショップの販売員：約 40 名

計 140 名

2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯

- ・監視員と呼ばれるスタッフがお客さんをホールから外へ誘導
- ・夕方 5 時頃までかなり大きな余震がしばらく続き、美術館の前の芝生の付近に職員は避難

その後、監視員など帰宅可能な者は帰宅。職員は残り、地震の様子を見ておさまったところで施設内の被害確認。暗くなりかけていたため展示室内に関して、その日は懐中電灯で室内に人が残っていないかなどを簡単に確認。それから収蔵庫の扉を開け、いくつかの作品落下を確認。

当日、3 人が宿直(宿直の必要からではなく、帰る手段がなかったことから)。

2. 震災直後 3月 12日～3月末日までの期間

インフラ関係：福島市内はガスが無事であった。

3月 15日：通電に伴い電話、インターネットの復旧

しかし、美術館は電氣量がかなり大きく、一度停電した場合には、点検が必要。ところが点検をしてくれる業者がガソリン不足と、あちこちから同じような要望があっても手が回らないということでこちらに来られなかった。

3月 18日：水道復旧

3月 21日：電氣復旧

4月 7日：空調再稼働

- ・被害状況は翌日に職員で確認(建物関係、作品関係、展示室内の状況)

建物に関しては幸い大きな被害はない。正面入り口の玄関(屋根が出っ張っている部分)の裏側の天井化粧板が 2 枚ほど落下。落下の際にちょうどその真下、玄関のガラスの部分に当たりガラスが割れた。

- ・専門家の被害確認

施工を行った鹿島建設が確認(3月 26日)。建物には大きな被害は無いということで、できるだけ早く玄関の部分の応急処置をしてから、本格的に工事。美術館の部材はすべて特注で作っているもので、注文していると間に合わないことから、化粧板部分は、材質や見た目が近い有り合わせのもので覆い、できるだけ早く再開するということになった。

3. 再開までの期間

1) 再開までのスケジュール決定経緯、判断基準

美術館の職員は、県の職員なので、県の方から避難所でのお世話をするという事で割り振られ、市内の避難所に2人1組で行くということをはじめたが、すぐに終了。理由としては、避難所そのものが福島県の場合震災の後に原発の事故の問題が出てきて、避難していた人たちが日ごとに移り住んでしまったことが大きい。つまり、当初は福島市の方に人が避難していたが、さらにもっと奥の会津の方などに移り住んだりということが起き、避難所そのものが人も場所も流動的だったと言える。実際にお世話をしたのは2組ほど、合わせて4人ほどであった。

再開については玄関部分の復旧工事が必要であった。鹿島建設のほうでどのくらいの時間で対応できるかと、年度末だったこともあり、復旧工事と言ってもお金が発生するため、その経費をどうやって捻出するかという県との折衝に時間がかかった。それでも3月中に工事の目途が立った。その後、空調がきちんと再開することと、もう一度点検(見た目は壊れていないけれど、見えないところで中は壊れていたというのがないという確認)を行って再開。

4月10日すぎくらいには、大体連休前には再開できるだろうという目途。実際に何日ごろがいいかという相談をして、再開の10日前ぐらいに決定。

4. 施設再開後

1) 利用状況で変化した点

来館者の数に変化→ジブリ展、その次の全国高等学校総合文化祭こそ来館者は多かったが、その後は減っている(20~30%程度)。福島県立美術館だけに限ったことではなく、福島県の似た施設ではどこでも起きている。特に県外からの来館者が減っている。

(B) 事業企画担当

1. 再開までの期間

1) 再開当日、利用者や来場者の様子から特に感じたこと

- ・来場者が一様に非常に明るかったのが印象的だった
再開後すぐに連休に入り、スタジオジブリ展であることも影響していると思うが、1日で1500人くらいの来場者があり、これはこれまでにない人数である(震災前は日曜日でも400~500人くらい)。また家族連れ、親子三代で来る方が多かった
- ・会場内を細い迷路のように設定していたため、入場制限をかけるほどであった(入場するまで最大1時間半待ち)。通常の展覧会では入場制限がかかるといらいだつものだが、来場者は皆ニコニコしており、それがすごく印象的であった
- ・来場者からは「すごく安心した感じ」や「この美術館にいてこれからジブリ展を見られるという喜び」というようなものを非常に強く感じた
- ・来場者に自由に書いてもらうアンケートを配付回収したが、とにかく美術館が再開してジブリ展を見られて本当に良かったという声ばかりであった
- ・館のスタッフには「この時期に再開しても、果たしてお客さんが見に来られるような環境なのか」などの不安も若干あったが、アンケートのコメントなどを見ると再開を批判しているようなことは全くなかった
- ・館再開直後には一応鉄道や道路は復旧していたが、まだ道路には陥没などがあった。また当時の福島原発の事故の状況から考えると、いわき市方面からは来場できなかったと思われる
- ・仙台、山形などからの来場者はあったが、それ以上遠くからはいつもより少なかったと思われる

2) 企画立案・運営方法で、震災前と比較して変更した点

- ・4月から常設展の内容を大幅に変え、「ふるさと再生、祈り」というテーマでリニューアルした。通常は所蔵資料を基に展示内容を組み立てるので、常設展を統一テーマで企画することは無いのだが、震災以後に美術館としてできること、やらなきゃいけないことを担当が熟考し決めた
- ・やきものの展示を控えた。展示に最適なのは免震台なのだが数が足りなかった。地震の際、常設の焼き物などはケースに入れて展示しており、通常はテグス(透明な糸)で固定していた。結果的に言うとテグスでは保護しきれなかった。ケースのガラス壁面と作品がぶつかって、双方に破損が発生した。テグスで固定するという手法には限界があると思われる
- ・絵画の展示において、「返し」がついた懸垂金具を使用していたことで、揺れにある程度対応できた

3. 施設再開後

- ・新しい事業計画を作るのが一番苦労した。福島県の方針で災害復旧に直接関係のない事業は予算をカットされた。当館ではジブリ展は既に始まっていたので続けられたが、それ以降の予算が無い状態から再開することになった
- ・6月に開催予定であった「帰ってきた江戸絵画 ニューオーリンズ ギッター・コレクション展」については、逆に中止するとキャンセル料が発生する可能性があるため開催できた
- ・企画展のオファーが寄せられ始めたのがその年の夏以降。当館の企画展を実施できるようになったのは次の年から
- ・支援のためのお話や持込みの企画は沢山あり、その中から実際にいくつか実施した。福島県立美術館にとっては企画展というものではなく、震災後の新たな震災復興への応援のメッセージを世界中から受けていることをアピールする、別の新たな事業になった
- ・事業費全面カットという事態は震災のあった年度だけの話で、翌年度に関してはそうではなかった。当館では前年

度と同様の予算要求を行い、結果的にはそれがほとんど削られなかった

- ・震災年度に実施する予定だった企画を延期して翌年度に実施したり、前述の持込み企画などもある。また震災地支援という趣旨での巡回展（ルーヴル美術館展、プライスコレクション__宮城・福島・岩手の3県を巡回）のオフア―もある
- ・それ以外にも被災地で仮設住宅に住んでいる子供たちへのワークショップやコンサートなど様々なオフア―がある。それらの中からこちらで時期や内容を検討して実施している

5) 再開までの復旧過程で、参考とした資料及び事例等

- ・再開に際してということでは特になし
- ・阪神淡路大震災の被害を教訓とした作品の展示および収蔵方法を取り入れていた
- ・文化財レスキューもまた、阪神淡路大震災の経験によって行われている

■文化財レスキューについて

- ・震災発生年度は、当館としては全く参加できていない。震災被害が大きかった海沿いは東京電力福島第一原子力発電所の爆発事故により放射線量が高く立ち入り禁止区域となっていたため
- ・2012年5月頃はむしろ福島から宮城に出かけ、石巻文化センターで被災した作品を宮城県美術館に運んでの洗浄作業に参加したりしていた
- ・震災発生直後には福島県内ではレスキューをやる状況ではなかった。レスキューが始まったのは2012年の夏ぐらいから。全町民が避難している海沿いの町の資料館に様々な資料がそのまま残っているが、一年間空調無く放置されているためカビの問題がある。特に歴史的な文書などを中心に福島県の別な場所に輸送するというレスキューが去年の夏から始まった
→双葉町、大熊町、富岡町の歴史民俗資料館にて実施。去年の12月まで数回に分けて運んだが、実際に運べた量は全体の3分の1か4分の1
- ・福島県の文化財レスキューはこれからである。しかし国の文化財等救援委員会は解散してしまうし、県も国が終わるのであればという姿勢を見せており、4月以降どうしたらいいのかということも現在検討中である

■美術品と福島について

- ・6月に開催予定だった「帰ってきた江戸絵画 ニューオーリンズ ギッター・コレクション展」は、地震当時は静岡で開催中であった。福島県が被災したことで、コレクション所有者のギッター氏が以下の点について心配した
 1. 貸し出し作品の安全
 2. 福島で開催したとして、見に来る人がいるのか当時福島は、アメリカから見るととても危険な地域だった。そこで当館では時期を秋にずらして開催できないかと要望。
- ・ギッター氏に放射線計測データ（館内外70か所程度）を定期的に計測し提出した
→9月に開催許可が出る
- ・再び大きな地震などが起きた際の計画についての計画書の提出

→山形の美術館に輸送する計画。状況を考えると多くの問題が発生する。実際に輸送自体が可能なのか。経費はどうなるのか。保険の問題は。県は対応できるのか。

- ・2012年に「ベン・シャーン クロスメディア・アーティスト—写真、絵画、グラフィック・アート」展を、福島県立美術館を中心に、神奈川の県立美術館と名古屋の市立美術館と岡山の県立美術館の4館で開催予定であったが、アメリカから借用した作品が福島には展示されなかった。
- ・しかし、海外から作品が借りられない等の状況は2011年度よりは緩和されつつある

■福島県における福島県立美術館の役割

・震災後、福島県におけるミュージアム活動を復興させるべく、福島県美術館連絡会議を立ち上げた(福島県立美術館の呼びかけ)

【参加館は、福島県立美術館、郡山市立美術館、いわき市立美術館、喜多方市美術館、諸橋近代美術館、現代グラフィックアートセンター(CCGA)の六館】

→放射線と美術品に関するレクチャーを開催

卷末資料 ヒアリング調査用紙

ヒアリング項目 (A)施設管理担当

SMMA ミュージアム被災状況と復旧プロセスに関する調査

(調査概要については別紙参照。)

ヒアリング調査は、(A)施設管理担当と(B)事業企画担当の二種類に分け、本紙のヒアリング項目をもとに実施いたします。(AとBでは設問が異なります。)非常に詳細な内容をお聞きする項目もありますので、事前に目を通していただければ幸いです。ご協力お願いいたします。

なお、不明な点などございましたら、お手数ですが下記連絡先までご連絡ください。

【仙台高等専門学校建築デザイン学科 坂口研究室 担当：西條美春
(sakaguchilab.snct@gmail.com)】

※使用者（ユーザー）：市民ギャラリー等の貸館サービスを利用している個人・団体。

来場者（ビジター）：鑑賞等、施設に来場した人。

1. 地震発生当日 2011 年 3 月 11 日（以下、3.11）

- 1) 地震発生時の避難の状況についてお伺いします。
スタッフ／使用者・来場者が避難した経路と（屋外までの）避難に要した時間などがわかればお聞かせください。
- 2) 3.11 当日の施設閉鎖までの経緯をお聞かせください。
例：17:00 関係機関に連絡 18:00 施設閉鎖
- 3) 避難時において、困った点などはありましたか？
例：避難経路の天井が落下した／漏水が発生した

2. 震災直後 3 月 12 日～3 月末日までの期間

- 1) 地震発生当日に普段の用途と変えて使用した部分があればお聞かせください。
例：避難所対応、帰宅困難者のための施設開放、支援物資の貯蔵場等
- 2) 上記の期間、スタッフの方々の業務は、どのような内容でしたか？
例：施設復旧に関する業務、他の応援業務（避難所の開設等）スタッフの安否確認
- 3) 施設内（建築、設備、備品、資料など）の正確な被害状況の把握は、何日頃、どのような人達で行いましたか？
- 4) 上記の期間、スタッフの方々以外に復旧支援などで、協力者の来訪がありましたか？
その団体名、内容、時期、回数をお聞かせください。

3. 再開までの期間

- 1) 施設再開までのスケジュールは、いつ頃どのような経緯で決定されましたか？
また、その場合の判断基準などがあればお聞かせください。

例：企画展示の再開、貸館事業の再開等

- 2) 改修工事以外に、復旧に際する業務はどのようなものがありましたか？
またその中で館のスタッフが主体となって関わった業務はどのような内容でしょうか？

例：使用者のキャンセル対応、企画内容の修正／変更

- 3) 施設再開までの過程において、復旧支援などで、各種団体またはボランティアなどの訪問を受けましたか？
その団体名、内容、時期、回数をお聞かせください。
- 4) 施設閉鎖中に、震災前に利用していた市民や活動団体と連絡を取る機会がありましたか？
団体や内容をお聞かせください。
- 5) 施設再開までの復旧過程で、参考とされた資料及び事例等がありましたか？
あるとすれば、その内容についてお聞かせください。

例：収蔵品の修復方法

4. 施設再開後

- 1) 来場者に対して、災害対応における留意・確認点が増えましたか？

例：避難経路表示、節電対応の掲示等

- 2) 施設貸出しに際して留意・確認点が増えましたか？

例：避難経路の説明、地震予知速報際の公演中止などの判断基準等

- 3) 上記 1) 2) 以外に、施設再開後、管理・運営方法で、震災前と比較して変更された点はありますか？
- 4) 施設再開後、利用状況で変化した点がありましたらお聞かせください。

5. その他

- 1) 管理・運営方法について、今回の震災の経験を反映させようと検討している課題などがあればお聞かせください。
- 2) 地域との関係において震災前後で変わった（変えざるをえない）点がありますか？
- 3) 上記の質問に加えて、地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じますか？
変わったとすればどのような点でしょうか？

ヒアリング項目 (B)事業企画担当

SMMA ミュージアム被災状況と復旧プロセスに関する調査

(調査概要については別紙参照。)

ヒアリング調査は、(A)施設管理担当と(B)事業企画担当の二種類に分け、本紙のヒアリング項目をもとに実施いたします。(AとBでは設問が異なります。)非常に詳細な内容をお聞きする項目もありますので、事前に目を通していただければ幸いです。ご協力お願いいたします。

なお、不明な点などございましたら、お手数ですが下記連絡先までご連絡ください。

【仙台高等専門学校建築デザイン学科 坂口研究室 担当：西條美春
(sakaguchilab.snct@gmail.com)】

※使用者（ユーザー）：市民ギャラリー等の貸館サービスを利用している個人・団体。

来場者（ビジター）：鑑賞等、施設に来場した人。

1. 2011年3月11日（以下、3.11）地震発生直後

- 1) 3.11から再開までの期間、スタッフの方々の業務内容は、どのような内容でしたか？
例：施設復旧に関する業務、他の緊急対応（避難所の開設等）の応援業務、収蔵品の整理
- 2) 再開に向けた準備以外に、復旧に際する業務についてお聞かせ下さい。
例：使用者のキャンセル対応、企画内容の修正変更
- 3) 施設閉鎖中に、震災前に利用していた市民や活動団体とコンタクトを取る機会がありましたか？
あるとすれば、どのような形式及び市民（活動団体）で行われていましたか？

2. 再開までの期間

- 1) 施設再開当日、使用者や来場者の様子から特に感じたことはありましたか？
また、市民（活動団体含む）から、寄せられたメッセージがあればお聞かせください。
- 2) 施設再開後、市民の利用状況で変化した点がありましたらお聞かせください。
- 3) 使用者に対して、災害対応における留意・確認点が増えましたか？
例：避難経路表示、節電対応の掲示等
- 4) 上記3)以外に、施設再開後、企画立案・運営方法で、震災前と比較して変更された点はありますか？

3. 施設再開後

- 1) 震災前に企画していた事業等の中で、震災を受けて会期を変更したものはありますか？
あるとすればその企画に震災の視点等を盛り込みましたか？

- 2) 新たに震災関連の企画を立案・実施したものがあればお聞かせください。
またその具体的な内容をお聞かせください。
- 3) 復旧の過程で、震災前から関係のあった団体等から支援を受けましたか？
またその団体とは現在も継続して連絡等を取りあっていますか？
- 4) 震災後新たに関係（ネットワーク（国内外問わず））を有した団体はありますか？
またその団体とは現在も継続して連絡等を取りあっていますか？

4. その他

- 1) 企画立案・運営方法について今回の震災の経験を反映されようと検討している課題があればお聞かせ下さい。
- 2) 3.11 を体験した文化施設関係者として、未来に向けて残すべきものはありますか？
- 3) 地域との関係において震災前後で変わった（変えざるをえない）点はありますか？
- 4) 上記の質問に加えて、地域におけるミュージアムの役割が震災前後で変わったと感じましたか？変わったとすればどのような点でしょうか？